国語表現学

方言学概説

東條操

國語科學講座

— VII —

國語方言學

方言學概説

東條操

株式會社
明治書院

國語科學講座

— Ⅶ —

國語方言學

方言學概說

東條操

株式會社
明治書院

目次

方言學概説

東條操

題はいかめしいけれど國語の方言の大體の話を書くだけである。言語地理學については、江文學士が執筆される筈であるから、それを見ていたゞく。

一 方言と方言學との概念

一 名稱 「方言」といふ漢語は我國でも存外早くから使はれてゐる。有名な漢の揚雄の方言が平安朝に渡來して居た事は日本國見在書目録によつて分るが、方言と云ふ漢語の使用例は、延暦二十一年の最澄の上表中に既に發見される。しかし、方言と云ふ漢語が廣く世の中に使はれたのは遙かに後の江戸期であり、方言の研究らしいものの起つたのもやはり江戸時代の中頃より末の事である。

方言と云ふ言葉は元來が中土東西南北の五方の言語の義で國語ばかりでなく外國語をも含めた稱呼である。日本で方言の重要性を認めた先覺の新井白石は東雅の總論に、

天下の言には古言あり今言あり、その古今の間に於て又其方言あり

と記して早く言語の時代的變遷と地理的相違とを知つてゐたが、その方言と云ふ中に外國語をも含んでゐたのは「韓地の方言」と云ひ「海外諸國の方言」と云つてゐるので知る事が出來る。之を廣義の方言と云つてもよい。

この廣義の方言が、段々意味が狹くなり一國語内の地方語に限つて使はれ、更には都會の言葉に對して田舍の言葉の意味に限つて用ひられ、方言とは可笑しきもの、鄙しきもの、不正なものといふ價値判斷を伴なふ言葉となつた。江戸時代に行はれた多くの方言の意味はこの輕蔑された田舍言葉の事であつた。所謂方言歌と云へば次の如きものである。

いぐひすや初音ぶんだせきくべいにあぜい啼かないぶさたたんべい（和訓栞大綱所載、奥州歌）

江戸時代には方言の外に「鄉談」と云ふ言葉も行はれてゐた、方言、鄉談とよく相對して使はれたり、國鄉談と云ふ言葉もあつておあん物語や丹波通辭などに用例がある。有名なロドリゲスの文典中にも Cuni quiodan と表記され・

日本の國々には「國鄉談」即ち或國又は地方に特有な言葉といつて多くの特有な言ひ方や言葉がある。又發音に於ても多くの訛がある。

と記してある。この鄉談と云ふ漢語は室町時代にも行はれたもので運歩色葉集にも見える語であるが、觀應元年の臨幸私記に、

唐言和語不二相通一者多矣、是以此記中日本鄉談相雜而書レ之

とあつて日本鄉談とは日本語の事であるから鄉談も古くは廣義で用ひられた事が分る。鎌倉期以上になると「風俗」と

云ふ漢語が使はれて居り、更に古くは「俗語」とか「俗」とか云ふ言葉が土地の名と共に使はれてゐる。

つぶてたたふてと云は阿波國の風俗なり(仙覺抄　八)

童蒙抄云あの國の風俗にてかいつみとはこもないふ也(袖中抄　七)

謂レ産爲二宰淵一者風俗言詞耳(筑紫風土記)

越俗語東風謂二之安由乃可是一(萬葉集　十七)

海中洲者隼人俗語云二必至一(大隅風土記)

嬥歌俗曰二宇多我岐一又曰二加我毘一(常陸風土記)

方言の意識が奈良朝にあつた事は東歌の蒐集を見てもわかる事だが、以上の方言とか鄕談とか云ふ漢語に相當する國語は上代にまだ發見する事が出來ない。神武紀に「訛」を訓じて「與許奈磨盧(ヨコナマル)」とあるが「なまり」と云ふ名詞形は上代には見えないし、また平安期以後の「なまり」と云ふ言葉は「なまり聲」など云ふ例が示す通り多く聲音に關して用ひられるのが普通である。また「なまる」の原義は分らないが之に不正と云ふやうな意味もあつたかと思はれる。「よこなまる」と云つたり「訛」の字をあてたりする事からさう考へられる。とにかく「なまり」と云ふ國語は方言の完全な同意語とは云へないのである。江戸時代になると音聲の外に田舍風の言ひ方も含めて「なまり」と云つたやうで博多小女郎浪枕の「長崎國訛り」も平家女護島の「薩摩訛り」も長崎方言、薩摩方言と同意味である。その頃の「お國訛り」と云ふ言葉も音聲にのみ限つたものではない。かう變化しては來たが今日でも「なまり」と云ひ、特に漢字で「訛語」と書くとどうしても音聲との連想が强いやうである。それでは方言に對應する他の國語はと云ふと「くにことば」「さとことば」

「ところことば」「いなかことば」近くは「とちことば」「ちことば」などの用例があるが何れもあまり廣く用ひられてゐない。今日のところ、方言と呼ぶのがまづ適當であらう。

二　方言の概念　方言と云ふ漢語は前に述べた通り、五方の言語の義であつて、早く云へば地方語と云ふことである。地方語と云ふ言葉も今日では「一地方の言葉」と云ふばかりでなく「田舎の言葉」と云ふ意味もある。方言と云ふ言葉もその通りで廣狹樣々の意味がある。

世間でよく使用する意味の「方言」は田舎言葉、それも都會などでは耳馴れないいかにも田舎臭い單語を指す場合が多い。ビル、バチ、ドンボやダダ、ガガなどは蛭、蜂、蜻蛉又は父、母に對して田舎臭い言葉なので「方言」と云ふ。從つてこの意味の「方言」のある事を恥しく思つて「私の村には方言はない」などと之を隱す風もある。方言と云ふものを、かう下品なもの、不正なものと考へさせる事は面白くないし、方言を單語の事だと思はせるのも面白くない。こんな考へ方をもととしては正しい方言研究が起つて來る筈はない。好事家が面白半分に方言を集めて見ようと云ふやうな態度はこんな考へ方に基くと思ふ。

また稍、學問した人は方言を標準語と對立させて考へる。即ち、その地方で使ふ言葉の中で標準語と違ふ言葉が方言であると云ふ考へ方である。この場合には標準語と音韻上だけ少し變つた言葉を特に訛語となづけて之を方言から別に離して考へる人もある。例へばビル、バチ、ドンボは訛語で、ダダ、ガガは方言であると云ふ見方である。とにかく方言をかう云ふ意味に解釋する事は實際の取扱上にかなり便利なところもあり、標準語と云ふものさへ判然して居れば都合のよい考へ方である。たゞ今日の日本のやうに標準語の曖昧な國では、この目安では或言葉が方言かどう

かを見分ける事が困難な場合が多い。地方人が方言語彙を編纂する時いつも困るのはこの問題であるやうだ。それにもう一つの缺點は方言と標準語とを對立させて考へる點にある。或國語が地方地方の影響で或年月の間に違つた發達をとげて若干の地方語に分裂する事はよしや標準語といふべきものが無くつても起り、これ等の地方語はその時でも方言と云ふ名をうくべきものである。

從つて學問上で云ふ「方言」の正しい意味は次の如きものである筈である。

一國語が相違せる使用地域の影響によつて若干の言語團に分裂した時に互に各團を方言と云ふ。

この場合に一寸むづかしい問題は若干の言語團と云ふ問題である。東日本と西日本とは言葉が違ふと云ふが、東日本の中で奥羽と關東とは違ひ、奥羽でも三陸と出羽とは違ひ、陸奥一國では津輕と南部と違ふ。大方言はこんな風にだん／＼下位の方言に分れて行くが、どこまでを最小の方言團體と認めるか、市郡か、町村かは定め兼ねる問題である。

なほ言語學者などは職業の區別などによつて出來る言語團體、江戸時代なれば士農工商の言語の別などを「階級方言」と云ふ人もあるが、之は地理的影響によつて出來たものでないから、方言と云ふ名を與へない方が混雜を招かないでよいと思ふ。この論文ではこんなものは方言の中に數へない。（本講座の菊澤氏の「國語位相論」參照）

以上によつて方言の概念はほゞ明かになつたかと思はれるが、なほ一言すべき事は方言はその地方の全言語現象を指すと云ふ事を特に注意してもらひたい。この點が明瞭でないために從來の方言研究が音韻や語法の研究を閑卻し、方言語彙を以て終始して居たのである。方言研究と云ふ以上は單語以上に音韻、語法に關する調査がほしいものであ

る。之は或時代の語彙を作つたからと云つて、その時代の言語研究を完成したとは云はれないのと同じ理なのである。

三　方言學　方言學と云ふ言葉は、日本ではまだ廣く使はれて居ない。中には方言學など云ふ學問が成立つかどうかを疑ふ人さへある程である。成程、方言集を作る程度の方言研究ならば方言學などと云ふいかめしい名には相當しないかも知れないが、將來、國語方言學と云ふ學問が獨立する可能性はある筈である。その方言學と云ふ問題を檢討して見よう。

國語學が特殊言語學であるやうに、方言學も實は特殊國語學だと云つて差支ないと思ふ。國語學は普通には所謂中央の標準語とでも云ふべき言語を主な對象とする。これに對して方言學では特殊な地方の言語を對象とするだけの相違である。國語學が方言をも對象として研究するならば國語方言學は國語學中の一部門として留まるであらう。そしてそれが方言學の最も正當な地位である。從つて方言學の性質も目的も、國語學の性質や目的とあまり相違してゐない。方言學は各地方に行はれる言語現象の間から、その背景をなす法則を發見し進んではその由來を說明し方言に關する十分な組織的知識を得る事を目的とする。方言學の成立を怪ぶむ人はこの知識の體系化の可能性を疑ふのであるが現象の背後に之を支配する法則の存在は否めまいと思ふ。方言學を特色づける地理的環境と言語との關係は極めて複雜である。氣候によつて言語に歪を生ずる事は從來の氣候說とは別の意味で考へてもよからうし、言語の傳播傾向と交通路との關係の如きも深究を要する問題である。方言內の言語現象と外的刺戟との交涉、それによつて起る言語の變遷生滅の相を、現前に存在する活きた言語によつて實際に觀察し得る點にも方言學の一特色はある。かくの如く方言學は地方の言語現象を對象とし之を支配する理法の發見を目的とする學問である。

近頃、何のために方言を集め、何のために方言を調査するかとの聲が起り、學者の之に對する解答も一でない。方言蒐集は人によつて目的を異にすると思はれるからこの答の多様なのは不思議ではないが、方言學者の蒐集ならばその目的は明瞭であるべき筈で、その研究は方言自體に留まるべきである。若しその知識の應用を考へるならば之は最早、純正な學問的立場ではない。

四　研究問題　方言研究も一般の言語研究と同様に、音韻、語法、單語の三方面に分けて之を觀察する事が頗る便利である。一地方の方言現象を記述する時にはこの三部門について觀察しその結果を記すべきである。地方語の記述も、標準語と同様、全言語現象を洩らさず記述すべきもので單語の如きもその地方に行はれる全單語を網羅すべきである。但し、一地方の全言語現象を悉く記述するとなると各地方について一冊の廣日本文典、一冊の言海を編纂することとなりその勞力は容易でない。そこで便法としては既知の標準語又は東京語を標準とし、その異同を明かにし相違點を詳記すると云ふ方法が案出される。多くの方言語典や方言辭書は從來も大體この方法によつて作られてゐる。之は作る者にも見る人の爲にも便利であるが標準語を準則とする爲に之に囚はれる恐がないでもない。

方言を對象として調査する場合、その地域の上に廣狹の別がある。一町一村の方言研究、一市一郡の方言研究、一國一縣の方言研究、更に進んでは數國數縣を併せた大地方の方言研究、日本全國の方言研究等、地域の擴大するに從つてその勞力は累増大する。この際、一町一村の方言研究に對するやうな精密さを一國の方言研究に望む事は困難であり、地域の擴大と共に研究は段々概論的・抽象的となり勝である、それでも日本全國の方言研究の如きは或は個人の調査能力では不可能であるかも知れない。

また一町村の方言研究にしても、單に現代に留まらず方言史にまで研究を進める事も考へられる。尤も現在では過去の方言資料はどの地方にも缺乏してゐるので方言の史的研究は頗る困難な事情にある。それでも種々な間接的な研究法が工夫されないでもない。この方法によつて方言の動的形態が愈々明かになる。

言語現象を調査しその狀態を記述するだけではその調査はまだほんとの研究と云ふ事が出來ない。その現象を探究し、その現象の動因を說明する事によつて研究は徹底する。かくの如き段階に進むためには一地方一時代の研究では目的を達する事は出來ない。その地方と關係ある諸地方の方言と之を比較する必要がある。所謂、比較研究と史的研究とによつて言語現象を說明する事が出來る。

この比較研究・史的研究を言語の全現象に對して行ふ事はかなり困難な場合が多い。爲に、或音韻現象、或語法形式、又は或特殊な單語だけに就いて之を行ふ場合が多い。この場合にその數種を巧みに組合すればその地方語の輪廓をほゞ知る事が出來る。また一單語の地方的變化を廣く精究すれば言語分布狀態を闡明する事が出來る。この研究は或地方の方言狀態を研究したものではないが之も一種の方言研究である。この研究に史的研究を加へるならば言語の發生、消滅、變遷の相を窺ふ事が出來よう。

日本に於ける各地方の方言分布の狀態が明瞭となるに從ひ、更に國語の方言區劃の問題も現はれて來る。

五　補助學　方言學の對象は地方の言語現象であるから之を研究するためには音聲學や語法學の一通りの知識は持たなければならない。これ等は補助學と云ふよりは寧ろ基礎的知識と見るべきものであらう。今日、鄉土民俗の研究と伴つて民俗學者の間に方言研究が行はれて居る。之は民俗學の爲に方言研究の必要な事を實證するものであるが、

同時に方言研究に於ても民俗學は大切なる補助學科である。民俗學の知識なしには方言採集の十分なる効果を期待する事は出來ない。

音聲學も從來は外國の音聲學の摸倣にすぎなかつたが大正頃から國語音聲學が佐久間・神保兩氏の手によつて樹立された。しかし、それは東京の語音の上に立てられた音聲學であつて各地方の方音については僅かに二三の事例を參照したに過ぎない。國語音聲學は今後、方音調査に向つて進出すべきである。方言研究者は之に共力して國語音聲の實相の研究に力を盡すべきである。外國の方言研究が音聲研究を中心としてゐるのは國語の性質にもよると思はれるが他山の石とすべき事である。近來、方言研究が「餘りに音韻的だ」と云はれた位に注意がこの方面に向いて來た事は喜ぶべき傾向である。

之に比べると方言の語法調査は極めて幼稚でその研究法にさへ迷つてゐる有樣である。今日の口語法は大體、文語法の直譯であるから、この口語法によつて方言語法を律する事は面白くないと思ふ。しかし、とにかく一應この語法の大體の知識なくしては調査を進める事は出來ない。新しい調査の法式を樹立する爲にも從來の文語法に通じる必要がある。なほ、方言語法には前代の語法形式の俤を留めてゐるものが少くないので語法史の知識が必要である。まだ國語史としては吉澤博士の著述があるばかりであるが、本講座には小林好日氏が日本文法史の名の下に文法の變遷を筆にされる筈である。とにかく文法・語法の史的知識は有ちたいものである。その他、言語研究であるから國語學・言語學の知識の必要は云ふまではあるまい。その外、方言に關係ある封建制度や交通關係を知る爲に史學・地理學も重要な補助學である。

好事で方言を蒐集する者は別として、方言學の爲の方言研究には以上の諸科學は補助學科でもあり基礎學科でもあり、この基礎なくして研究に進む事は勞多くして得る所は少いと思はれる。

六　國語方言學史　國語方言學と云ふものはまだ成立してゐないと云ふのが正しいと思ふ。方言の科學的研究の起つたのも明治以後の事である。なるほど、方言の意識は國人には早くからあつた。初めに述べた通り、萬葉集に東歌が集めてある事からも風土記その他に方言の記載のある事からも察知する事は出來るが、この方言研究の萠芽はそのまま伸びなかつた。平安朝に東國の音や筑紫訛が輕蔑されても、之はたゞそれ丈で何等研究への導きとはならなかつた。古語と方言との關係は平安末期頃から注意されても歌學者が二三の經驗と思ひ付を述べただけである。室町期になつて人國記や金春禪鳳の謠の書物の如く各地方音を比較する者の出て來たのは一つは交通の開けた爲であらうが、これ等も觀察とは云へても研究を以て目すべきものでない。

江戸期になると方言に關する記事が著しく增加して來て方言が注意されて來た事が分るが、その中で研究と名づくべきものをあげれば次の如きものである。

第一は慶長九年から出版されたロドリゲスの日本語典中の方言に關する記載である。之は當時流行した「京へ筑紫ニ坂東サ」の三方言鼎立の意識を方言事實から實證したものとも考へられるもので日本方言の最初の科學的記載である。

第二は俳諧者流の方言研究で慶安三年の安原貞室の「かた言」と、安永四年の越谷吾山の「物類稱呼」の外に一茶の晩年に書いた「方言雜集」を加へてもよい。中で物類稱呼は唯一の方言辭書として今日に珍重されてゐる。之は俗語辭書

としての俚言集覧と並んで注意すべき特殊辭書である。
第三は各地方の篤志家によつて編纂された地方の方言辭書で多くは稿本であり、舊藩の學者の著述などが多い。
維新以後の方言研究は外人の手によつて先づ開かれ、明治廿年頃から標準語普及・方言矯正の意味で方言調査が行はれたが、三十五年に出來た國語調査委員會は音韻と口語法とについて最初の全國的調査をした。それは全國の各郡市を單位としたもので全く劃期的な調査であつた。この調査の餘波で明治末年には相當の調査物が現はれたが大正に入つて衰へた。然るに昭和時代に入つて新興の民俗學と新に紹介された言語地理學の影響をうけ、民間の篤學家によつて全國的に方言研究が再興し、東京、京都、廣島、名古屋などに學會が創立され方言尊重の爲の方言研究が新に提唱されるに至つた。

二　方言研究と資料

一　研究の二面　方言の研究は之を過去の方言の研究と、現行の方言の研究とに分ける事が出來る。過去の方言研究は方言文獻の少い結果、かなり困難であるが、現行方言の研究調査は多くの記錄の外に地方人につき調査する方法もあり、調査旅行によつて自分の耳から直接方言を聽き得る便宜もある。
過去の方言の研究、卽ち方言の史的研究でも、極く近い過去の事は高齡の老人の記憶に徵する方法もあるが、一般に云へば過去の方言は記錄に就いて間接的に之を知る以外に方法がない、我國では明治以前は雅語文語を尊み俚言口語を卑しとする風があつた爲に、方言に關する記載の如きは之を文書中に發見する事が極めて稀で、之を探すにもめ

くら探しに群書を渉獵するより外の方法はない。幸ひ江戸時代は方言に對し稍〻好奇心をもつた時代であつたから、相當な資料を蒐集する望はあるが、江戸以前に至つては絶望と云つてよい位である。

江戸以前の方言資料や、之等の資料を如何に扱ふべきかと云ふ問題については次の二論文の一讀を勸めたい。

東國方言沿革考　新村出氏(東方言語史叢考所載)

國語史(中央語と方言)　春日政治氏(國文學講座)

二　江戸以前の方言資料

奈良朝までの文獻で方言の見えて居るのは風土記・萬葉集である。特に萬葉集の東歌・防人歌は東國の音韻語法の特色を除ふべきものとしてまことに貴重な資料である。東歌の語法的特色については山田博士・新村博士の研究を初め關係論文は必ずしも少くない。

なほその外に古代地名を精究する事によつて上代の方言の單語的方面―特に地形語彙―を明かにし得る望がある。柳田先生の地名研究などはこの方面に光を與へるものである。

平安鎌倉の兩時代に於ては方言資料と云ふべきほどのものは殆ど無い。歌學書中に若干の單語を拾ひ集め得られる位を喜ばねばならない、例へば袖中抄に例をとれば、

巻一　もすの草くき(坂東―草の葉のゆるぎ)

　　　おひや(常陸風土記―狭き淨)

巻二　めさし(赤摩―女童)

巻四　きけし(東國―しげし)

巻七　かつみ（無名抄、童蒙抄―陸奥―こも）

このてかしは（萬葉抄―奈良坂―おほとち）

巻八　おほをそとり（古書―東國―鳥）

ころろ（東詞―來かし）

さくさめ（東國―姑）

巻十　すがる（關東―蜂）

けけれなく（無名抄―甲斐―心なく）

くやる（無名抄―駿河―伏せり）

巻十二　はまおぎ（伊勢―葦）

みさえだ（無名抄―美濃―下枝）

巻十五　あぬ（筑紫―我）

あゆの風（童蒙抄―越中―南風）

巻十九　おそ（奥義抄―東國―そらごと）

以上は國名の見えて居るものだけを拔いたので漫然と田舍詞と記したものはまだ若干ある。多くは他書から引用したもので無名抄・童蒙抄などによつたものが多い。これ等の方言はあまり信用のおけるものでないが、歌學書に引いてある單語はまづこの程度のものである。單語以外の音韻や語法などの記事は極めて少い。承德の悉曇要訣に訛音の記

事が見えたり、天曆の後漢書楊雄傳の假名點によつて當時も單綴語が長呼されて居た事などの知られる事はその稀な例である。尤も、アクセントの資料は類聚名義抄を初めその他鎌倉期にかなりの資料がある。語法方面では土佐日記に船頭の言葉などが寫してあるが土佐方言らしいものは見えない。よく引かれる一月七日の條の「またまからず」と云ふ言葉も方言とする事は承認し難い。軍記などに東國武士の言葉があつたり、又義仲や實盛の言葉が方言の描寫として引かれるが語法の相違を示したものは少い。文永頃の塵袋の「阪東ノ人ノコトバノスヱニ「ロ」ノ字ヲツクルコトアリ「ナニセロ」「カセロ」ト云フ」と云ふ如きは眞に珍しい資料である。

室町になると前にも述べた「京へ筑紫ニ坂東サ」と云ふ語が現はれて來る。種々なものに見えるが早く明應五年正月九日の三條西實隆公の日記に宗祇談として記されて居る。金春禪鳳の毛端私珍抄に「なまる事坂東筑紫などのなまりもおよそ似たる物也、四國なまりはべち也五畿內京都のこゑにもちがふ也」として例を擧げてある記事も注意すべきであるが、室町末期の方言狀態については日本耶蘇會の伴天連ロドリゲスの日本語典の方言の記事こそは我國最初の方言の科學的記載である。都、中國、豐後、肥前、肥後、筑後、博多、備前、關東等についてその方言の特色をあげてある。本書の記事については民族第二卷第一號の橋本教授の論文に讓る。同じ學林から慶長八年に出版された日葡辭典にも約四百語の方言が揭げてあり、之については方言第一卷第二號、方言第二卷第二號第五號の近藤國臣氏の抄譯を參考されたい。（外に外人の方言研究としては江戶期のもので瑞典のトゥーンベルグの日本紀行中の日本語がある。長崎方言である。氏は安永四年に來朝した人である。この紀行の日本語は南島方言資料に轉載してある。外に同氏に日本語解說がある。之は方言第三卷第九號に覆刻してある。）

三　江戸の方言資料　江戸時代の「かた言」や「物類稱呼」は「浪花方言」「丹波通辭」と共に日本古典全集第四期の中に收められ、解題も卷首に加へてある。その上、最近に立命館出版部から校本物類稱呼諸國方言索引が出版され、物類稱呼本文と索引が一冊になつて出たのは頗る便利である。物類稱呼はとにかく全國の方言を天地・人倫、動物、生植、器用、衣食、言語等に分類した辭書で方言研究者の必ず座右に具ふべき書籍である。江戸時代に各藩の儒臣などの手によつて記された稿本の方言書も段々と發見されて來たが東北地方に多く九州に少い。東北には御國通辭（寬政二）（南部叢書第十冊）仙臺言葉（享和五）、方言達用抄（文政十）、仙臺方言（以上三部仙臺叢書第八卷）濱荻（言語誌叢刊仙臺方言合冊）濱荻（明和四）莊內方音攷（言語誌叢刊莊內合冊）外に松前方言考（嘉永元）も寫本として傳つてゐる。然るに九州には幕末の筑紫ことば（「方言」一卷三號轉載）と云ふ稿本を發見しただけである。東北に次いでは名古屋と大阪である。名古屋には尾張方言（寬延元）水がはり（文政二）（以上二部尾張の方言續編所收）の外に稿本で宮訛言葉の掃溜（文政）が殘つて居る。大阪には浪花方言の外に新撰大阪詞大全（天保十五）が刊行されてゐる。

江戸文學中には方言を含んだものが少くない。「京阪方言に姑く問題外とする、江戸前期の文學は京阪に發達してゐるだけに之を擧げては際限がない」淨瑠璃に方言を取入れた巣林子の工夫は碁太平記白石噺にその後繼者を得たわけであるが、その外淨瑠璃系統では鄕土藝術として仙臺淨瑠璃や豐後淨瑠璃がある。俳諧なども地方語を取入れたもののある事は文政に甲州方言の歌仙があつた事からもわかる、奴俳諧などもこの中に入れてよいかも知れない。狂句では土佐や肥後に方言を入れる風が流行した。今日では薩摩狂句も有名である。江戸文學の中で方言文學と見るべきは滑稽本と洒落本とに多い。之は寫生の作風にもよるが滑稽の要素として取入れられたものと見える。

地方文人の手になつた所謂郷土文學の中にはこの種のものが少くないがこれ等は稿本のままで埋れたものが多く、どの位有つたか分らない。しかし吉澤博士の「尾張名古屋方言で書かれた洒落本と中本とを紹介して」(國語國文の研究)を見ると名古屋だけで洒落本九種、中本四種を數へる事が出來る。尾崎久彌氏はこの種の珍しい郷土文學の蒐集に苦心し、江戸文學研究に「地方物と方言」の一文を書かれた事がある。山形鶴岡附近の溫泉場を畫いた「湯のあか」、信州湯田中を畫いた「郡風流直垣」、駿河二丁町を畫いた「阿部川の流」、滑稽本で備中井原附近を扱つた「膝栗毛副編」、佐賀の膝栗毛と云はれた「伊勢道中不案内記」など場所柄から見て珍しいものである(三都や名古屋で刊行されたものは觸れない事とする)。これ等の中に現はれた方言はわりに地方語に近いのが長所である。江戸などの作者は方言と云つてもいゝ加減なものを書く事が多い。

轉じて隨筆類などを見ると零細な記事ではあるが方言に關したものが多數發見される。玉勝間に方言に古語の殘れる事を說いてある事は有名であるが、この考は鎌倉期に既に現はれてゐる。この類の說でなく隨筆・地誌などの諸國の方言に就いて記したものを少しあげて見よう。やゝ記事の長いものでは、

閑筆話柄(津輕方言)　世事百談(出羽庄内等)　燕石雜志(關東)　羇旅漫錄(東海道)　裏見寒話、獨寢(甲斐)
一話一言(八丈島)　烹雜の記(佐渡)　飛州志(飛驒)　見た京物語(京都)　浪華の風(大阪)　街の噂中本(大阪)
皇都午睡(京阪)　秋長夜話(廣島)　日向纂記(日向)

などがある。一書に載行の記事のあるものなら、枚擧に苦しむ位である。隨筆索引などによつてもその一斑を知る事が出來る。

音韻語法に關した記事も漸く多く、東北の音に關しては莊内方音攷に委しい。出雲については中村守臣に出雲音と云ふ著述があるらしい。隨筆類にも東北の濁音、上總の加行音脱落、近畿の一綴語の長呼、出雲の唇音、四國九州のじぢずづ音等については隨筆中にその記事を發見する事が出來る。和訓栞大綱に、

出雲人ははひふへほの音甚重くふわふゐふうふゑふおと聞ゆ、……安藝人はくわといふ事を凡てかと云へり……志摩の國安乘の俗はあの音皆わとなる……上總國の南の方の人はかきくけこを得いはで皆わゐうゑおに轉ず房州も同じ……らりるれろも正音ならず、かゝる事國々に多かるべし。

とあるのは代表的なものである。

語法では關東の「べい」は諸書で論ぜられたが九州の二段動詞の保存も知られて居り、特に紀州の一部にも同樣の二段動詞のある事が紀伊名所圖會などに注意されてゐるのは面白い。行くを行かずと云ふ本州中部の方言も鹽尻や隨意錄などに述べてある。三河あたりで東西方言の分れる事も分って居た。アクセントの東西の相違に關する記事も諸書に見える。浮世風呂の三馬にしてなほ東西言語の品定めを試みてる。

古語は方言に殘るとの說は古語解釋に方言を利用する傾向を生じ、有名な鹽尻の逸話を生んだ。古義の著者なども萬葉の語釋に土佐方言を引用したがかゝる例は決して少くない。一方、本草學者もよく方言を蒐集したが小野蘭山の本草綱目啓蒙の如きはその著しきものである。

以上述べた通り、江戸時代の方言資料は種々なる方面に之を求める事が出來る。之を集成する事は容易でないが、音韻・語法・單語の各方面とも、組織的な知識を得る事は困難でも相當な資料を集める事が出來ると信じる。なほ本

講座の佐藤鶴吉氏近世の國語」を參照されたい。

四　明治以後の方言資料　明治以後の方言文獻は明治初期の外人の研究に始まり二十年代より方言書の出版を見、三十年代に至つて高潮に達し明治末年より大正期はやゝ衰へを見せたのが昭和期に入るに及び方言研究の二度の全盛時代に入り資料も著しく激增した。資料を分けて、方言に關する單行本、地誌類、雜誌論文等に分ける事が出來る。地誌や雜誌中の方言記事にも長篇のものあり、單行本にも價値の少いものもあつて必ずしも單行本だけで滿足する事は出來ない。

單行本については國語教育第十六卷第九號の方言研究號に刊行方言書目として昭和六年六月までの分の書目を掲げたから詳細はそれに讓つて以下、その中の極めて重要なものに新刊書を加へて掲げて見よう。

津輕語彙　北山長雄（昭和八）
米澤言語考　内田慶三（明治三五）
仙臺方言音韻考　小倉進平（昭和七）
茨城方言集覽　教育會（明治三七）
信州上田附近方言集（增補版）　上田中學（昭和七）
佐渡方言集　矢田求（明治四二）
石川縣方言彙集　教育會（明治三四）
滋賀縣方言集　大田榮太郎（昭和七）

秋田方言　秋田縣（昭和四）
山形縣方言集　師範學校（昭和八）
相馬方言考　新妻三男（昭和五）
埼玉縣幸手方言集　上野勇（昭和八）
靜岡縣方言辭典　師範學校（明治四三）
富山市近在方言集　田村榮太郎（昭和四）
福井縣方言集　師範學校（昭和六）
○南紀土俗資料　森彦太郎（大正十三）

和歌山縣方言　女子師範（昭和八）
廣島縣方言の研究　師範學校（昭和八）
（愛媛）丹原地方言語集　杉田正世（昭和五）
日向の言葉　若山甲藏（昭和五―七）
佐賀縣方言語典一斑　清水平一郎（明治三六）
壹岐島方言集　山口麻太郎（昭和五）
熊本縣方言音韻語法　池邊用太郎（昭和八）
鹿兒島語法　村林孫四郎（明治四一）
八重山語彙　宮良當壯（昭和五）
岡山動植物方言圖譜　桂又三郎（昭和七―八）
島根縣に於ける方言の分布　女子師範（昭和七）
豐後方言集　第一高女（昭和八）
福岡縣内方言集　教育會（明治三二）
○長崎方言集覽　古賀十二郎（大正十四）
島原半島方言の研究　島原第一小學（昭和七）
鹿兒島方言集　教育會（明治三九）
採訪南島語彙稿　宮良當壯（大正十五）

以上の中、○を附したのは元來、地誌中の一篇であるのだが、地誌中の方言篇の白眉のものと思ふので掲げたのである。その他の地誌で記事をのせたものに就ては前に述べた刊行方言書目に附記しておいたから、ついて見られたい。

方言記事を載せた雜誌では「日本亞細亞協會々報」に多くの外人の方言研究を掲げたのが初であらう。ダラス氏の米澤方言研究は第三卷に現はれてゐる。明治八年のことである。明治十九年から發行された「東京人類學會雜誌」と明治二十九年以後の「風俗畫報」には方言欄があつて毎號、地方の報告を掲げた。明治期の方言資料は大體この兩誌の上に求める事が出來る。昭和の方言の流行を誘致したのは柳田國男先生の御力であるが先生御編輯の「郷土研究」に方言欄の特設されたのは大正五年の事で、同誌休刊後は、同七年創刊の「土俗と傳説」や、大正十四年創刊の「民族」に方言記

事を續載した、特に民族には方言に關する柳田先生の小論文などが載つてゐる。昭和六年に復活した「郷土研究」も方言記事を掲載して居り、「旅と傳說」も一時、方言記事を出したが之には雜誌「方言」が創刊されてから掲載を見合せて居る。雜誌「方言」が春陽堂から創刊號を出したのは昭和六年九月である。「國語教育」もその九月に方言研究號を特輯し以後方言研究欄を設けてゐる。「音聲學協會々報」も方言關係記事を載せる事が多い。

之より先、昭和五年八月に謄寫版ではあるが盛岡に「方言と土俗」が生れ、六年七月滑川から「越中方言研究彙報」が出て方言專門の雜誌が之で三種となつた。この外に昭和四年に大田榮太郎氏は「方言集覽稿」を出し、六年に國學院大學方言研究會は方言誌を、七年に廣島方言學會は年刊第一輯を公にした。

郷土民俗を研究する各地の團體から發行される機關誌には方言記事の揭げてないものの方が寧ろ稀であるが埼玉の「むさしの」、濱松の「土のいろ」、尾張一の宮の「土の香」、岡山の「岡山文化資料」、愛媛の「愛媛縣周桑郡郷土研究彙報」などには方言關係記事が極めて多い。本山氏の日本民俗研究會、梅林氏の土俗玩具研究會なども方言に關する單行本を出してゐる。

昭和の方言資料は以上の如く單行本、地誌、雜誌論文の各方面にわたつて、かなり豐富であり、今後も續々激增する形勢にあると云つてよい。

これ等の文獻を利用するに當つて最も多く不便を感じる事は一は表記法の不完全な事であり、一は說明の不十分なことである。今日の表記法は之を江戸時代に比較すれば遙かに進步してゐるが、なほ歷史的假名遣を混じるものがあり、地方特有の音やアクセントなどは、その表記を如何にすべきかに迷つてゐるのが現狀である、單語の意味や用法

の説明が極めて不完全で類似の標準語を以て換語して満足してゐる程度のものが多い。時に品詞別などが加へてあつても之も妥當ならぬものが多い。

しかし、明かに誤記と認めらるゝものでも、一應は地方人に質問して正否を檢し、その上で之を訂正する方法によらなければならない。前代の方言で正否を判定しにくい場合は誤記と思つても、そのまゝ原形で保存すべきであつて妄に改竄する事は愼しまねばならない。

五　方言の實地採集　現行の方言の研究に於ては文獻を使用する事は補助手段でなくてはならない、調査はなるべく自分の耳によつて行ふ必要のある事は云ふまでもない。

ある地方の方言を十分に觀察し調査し得る人は嚴密に云ふなら、その土地に生れその土地に育ち現にその土地に住まつてゐる人だけである。

他郷人の調査は如何に優れた採集者であつても方言の眞に達する事は困難である。特に數日の滯在などでは豫め用意していつた調査事項の答を得るのが關の山である。幸に數旬を其處に送るを得ても調査範圍には自ら限度がある、一年の年中行事、春夏秋冬の自然の推移、それ等に關する方言をその間に網羅するのは事實上困難である。

尤も、一步進んでその地方に轉住した場合には他郷人としては最も完全な調査資格を得る事となる。實際かゝる境遇にある他所者が方言研究を初めた場合は極めて多い。土地に生れただけで他地方に出ぬ者は比較の方法がないので却つてその土地の方言の要領を握りにくいが他所者は自己の方言と比較して方言の特徴を早く了得する事が出來る。

しかし、結局、或土地の方言を微細にわたつて研究し得るものはその土人である。この場合には内省法によつて研究

調査を進める事が出來る。他郷人の場合では内省法を用ひる事は危險であり、常にその地方人との共同調査を試みなければ、その結果に自信を持てないものである。但し地方人でも長く郷里を離れて他地方に居住してゐる者はやはり内省法を使用する事は困難である。

他郷の者が方言を調査する場合は豫め、若干の調査事項を選定し之を調査するか、又はその方言の大體の輪廓を調査する事によつて滿足すべきである。音韻語法は兎に角、單語調査を遺漏なく短日月に行ふ事は殆ど不可能である。

他地方の方言調査には二種の方法がある。一は質問條項を地方に送りその回答を求めるもの、一は自らその土地に臨んで親しくその地方人に就て調査するものである。第一の方法は若干の單語又は簡單なる語法調査に限り許さるべきもので、今日の如く音聲學的知識のない地方人に音韻調査を依賴する事は無駄でもあり危險でもある。極めて簡單な事項でも之を例示し、單語の問題に變形して課すべきである。答者は理想としては方言に興味を有し國語の素養のある者に求むべきであるが多くの地方にかゝる理想的答者を得る事は至難である。從來、成功した例を見ると小學校又は町村役場に依賴するのが最もよい結果を收めて居る。師範學校に託し生徒に賴むのも一法である。之は熱心な指導者がある場合と、學校當局が不熱心な場合とで著しく結果が違ふ。それに師範の生徒の出身地は繁華な町村が多く地域的に行き渡らぬ惧がある。何れの場合にもせよ質問事項の數を少くし、樂に解答し得る樣に質問せねばならぬ。例へば「蝸牛の方言は何と云ふか」と尋ねるよりは「蝸牛の方言はAかBかCか、又は何と云ふか」と云ふ風に具體的に適切な實例を擧げて聞く必要がある。この質問紙による調査法は或單語の全國的調査などに利用される。

調査者自身その地方に出向き、親しく地方人に就て調査する場合にも、その方言の大體の知識を持ち調査事項も主

要なものは出發前に之を定めて置く位の用意がほしい。
地方に出ては汽車やバスの乘合客などから採集する方法もあるが、果してその地方人か否かを確かめる事が必要である。地方に行くと存外熱心な研究家もあるので之は第一の答者としなければならない。老人は古い方言を記憶してゐる點で貴い答者であるが中々利用し憎く、時に出鱈目を云ふ者もある事を承知して置かなければならない。教育のある者、小學敎員、中學生などに存外よい答者がある。答者には一町村少くも老若男女の數人を集めて巧に正しき解答を導き出したいものである。一人の答者の云ふ事をそのまゝ全部信じる事は面白くない。質問は答者を倦ましめぬやう、堅くならせぬやうに心掛けて行はねばならない。出來ればその地方の方言位、質問者が使ふ方がよい。質問に變化を與へたり、茶菓を饗したりする方法もあるが、先づ方言研究の必要や興味を敎へて奏功する場合もあり、質問者の熱心な態度がよく答者を動かす事もある。これ等の質問法の外に自然の會話を側から聽いて之を書取る方法もある。之はある練習と熟達とを要する事である。
なほ外に、賃物に徵して方言を調査する方法があり、これは標準語にない語詞を採集するに便利な方法であるが、之等については單語の調査法に於て再說する。

三　方言區劃の問題

一　三大方言區劃　方言區劃を論じるのは丁度、文學史などで上古、中古、近古、近世と云ふやうな年代を分けて文學の發展變遷を論じるやうなもので研究上便利の多い事である。勿論、奈良朝の文學が平安遷都を境として一朝に

して全く別な平安文學に變つたと云へないやうに關東方言と京阪の方言との境が何縣何郡何村にあつて、その境界線を一歩東に入れば關東方言、一歩西に入れば京阪方言と云ふやうな事も事實上は無く、ともに過渡時代、中間地帶と云ふやうなものを考へる方が無理が少いわけである。たゞし年代を分け、地方を分ける以上はどこかに境界を設ける必要が出來るので人爲的な一線を設けるのは止むを得ない。方言の現象では或特殊現象などが一筋の川を境として分れると云ふやうな事も往々ある。また舊藩の領地の關係で或町村だけが周圍と違つた方言を持つて著しい特色を見せる事もあるが之は一般の例とするわけには行かない。

方言が違ふと云ふ感じは誰も感得する事が出來る。如何なる標準によつてと云ふやうな明確な意識はなくても漠然と之を感じる。我國語の關東の方言と京阪の方言との相違の如きは何人も之を否定し得ない感じである。勿論、觀察を細かくすれば一地方内の言語の相違も感じられる。例へば青森縣に住む人ならば津輕・南部の方言の對立は容易に氣づく事である、之はやがて一村の言葉と他村との言葉との相違の感じにまで下つて行けるのである。東京の山手、下町の言葉の對立など云ふのはそれである。小方言の區分は姑くおいて、日本の方言は之を大別したらどうなるかと云ふ事を國民の感じの上に求めて見よう。まづ東日本と西日本との方言の相違は最初に氣づく事と思はれる。今も昔も東海道を旅行する人が愛知縣附近に於てこの東西方言の接觸を感じる事は變りがない。京都の者は遠州へ入ると言葉の變つた事を感じ、江戸を出た者は三河に入ると言葉の變つた事を感じた。

所謂關東訛、阪東聲は昔から關西人の注意を惹いた。この東部の方言がかなり古くから存在してゐた事は萬葉集の東歌防人歌に於て證明する事が出來る。九州の方言もかなり古くから注意されては居たが之はやはり西日本式の言葉

で東國方言ほどの強い色彩は無かつた。室町時代に言語上の一大變化が起つたがこの時に九州の方言には稍保守的な力が働いた。この爲に本州西國は二段動詞が一段化したり、「じぢずづ」の發音の區別を失つたにも拘らず九州方言には二段動詞の俤を留め「じぢずづ」の音を保存した。かくて九州方言は西日本の他の方言からかなり離れるやうに至つた。前にも述べた室町時代の「京へ筑紫ニ坂東サ」と云ふ世諺はこの方言意識を反映したものである。大體、日本の方言を本州東部、本州西部、九州との三つに分ける事は今日では穩當な分け方かと思はれる。その本州東部と本州西部との境界線は、越後と越中、北信と南信、遠江と三河との間を通つて引かれると云ふ事も今日は大體承認されてゐるが、本州中部地方は言語上でも東西兩方言の中間地帶であるので之を間に立てて本州方言は之を東部、中部、西部の三方言に分けてもよい。四國は本州西部方言に入れて差支ない。

本州東部、本州西部、九州の三方言を認めるこの意識はどうして成立したものか。我々は今、漠然とそれを感じてゐるだけだとしても、必ずやこの意識を生みだした客觀的事實が伏在してゐる筈である。

言語事實は音韻・語法・單語の三方面に分けて觀察する事の便利な事は既に述べた所である。これ等の音韻現象、語法現象又は單語の分布の上に三方言を分くべき何等かの事實が存在してゐるかどうか、之を研究して見よう。

二　音韻上より見た區劃　音韻の上では關東には濁音が多いとか促音が多いとか云ふ事をよく云ふ。また、二重母音が色々と音變化を起す事も關東に多い。九州もそんな點では京阪よりは關東に近い。京阪は二重母音が音變化を起すことは少く、短呼も少い。特に一音節語の長呼は著しい特色である。江戸の田宮仲宣は、

音は畿内は大體平聲なり西國は去聲にして東國は上聲なり

などと述べてゐる。しかし、以上の如き觀察は實はあまり確實な科學的根據のあるものでなく常識論を出ない。「センタク」「センダク」（洗濯）、「ハジ」「ハシ」（端）の清濁が丁度、東日本と西日本とで反對になつてゐるが之は音韻現象として論ずるよりは單語分布として扱ふ方が至當である。

音韻現象の分布を調べた人では理學博士矢田部良吉氏がある。氏は「カ」「クヮ」の分布を全國的に調査したが之は後に國語調査委員會で精査され、「クヮ」音の分布は大體に於て青森より福井に至る日本海沿岸地方、出雲、四國九州の大部であつて、近畿にも見出される事が明かにされた。矢田部氏よりも多くの音韻現象について分布を論じた人に大島正健博士がある。氏の說は明治二十八年の「國民の友」に「地方發音の變化及び其配布」として發表され、音韻漫錄中に收めてある。s・sh音、h・f音、k・kw音、g・ng音、イとエ、シとス、チとツ、n・d・j・y音の轉換、r音、シとヒ、t音、ヂヅとジズ、音便、w音、ユとヨ、エイ音、アイ音等主要なる音韻現象をあげてその地方的分布を論じたものである、分布については遺漏あり、誤謬もあるがこれだけの現象を當時調査した博士の功績は大きなものである。この中でg・ng音の分布は國語調査會の調査の結果、ng音は兵庫縣德島縣を界としてそれ以東に廣く行はれる事が明かになつた。只新潟縣より東南、群馬、栃木、埼玉、千葉の數縣に亙る一帶の地方にこの音が缺けてゐる。なほこのng音の分布は石黑氏や宮良氏によつてその後補足された。「エイ」の二重母音は同書に、

清明禮の音は九州にてはセイ、メイ、レイと其下の音を字の示すが如くイ音に呼べど他の諸國にては多くセー、メー、レーとエを延ばしたる音に呼ぶ

之は國語調査委員會の調査も略之に一致してゐる。音韻の分布を調査する者が常に氣づく一現象は、奧羽特にその西

部、北陸道、出雲、九州西部にかけて類似の現象の發見される事である。F音、she音などの分布はその一例である。特に出雲と奧羽との類似は多くの人によつて注意され、大島博士も伊澤修二氏も之を民族の移動によつて證明せんとせられた事がある。

京都のアクセントと江戸のアクセントが著しく相違し、特に二音節語に於ては多く反對な事は江戸の學者の早く注意した所である。明治以後にアクセントの研究は却つて閑却されたが世界大戰當時露人ポリワノフ氏が來朝し東京の外に青森、秋田、京都、土佐、長崎等の方言のアクセントを調査したのが動機となりアクセント研究がその後盛となつた。近頃・東京文理科大學方言研究會の大原孝道氏が中國近畿のアクセントを調査し、更に東大言語學の服部四郎氏は全國のアクセント調査に着手された。服部氏も大原氏も出雲を除く中國地方のアクセントが著しく近畿のアクセントと相違し、寧ろ關東のアクセントに近い事を報告されてゐる。服部氏は近畿アクセントと東方アクセントとの境界線を求め東海道に於ては揖斐川の線にある事を發見された。

かくの如く音韻現象の分布は必ずしも本州東部、本州西部、九州の三方言鼎立說を支持するものばかりではない。然らば語法現象に於てはどんな分布を呈してゐるか、次に之を一瞥して見たい。

三　語法上より見た區劃　語法現象が東西兩方言を分ける標準となつた事は國語調査會の調査以來、世間周知の事實であり之を再說するのは甚だ煩はしい。その概要は口語法調査報告書の分布圖概觀によつて知る事が出來るので細說しない（本講座の保科孝一先生の「國語政策論」參照）。たゞ、分布の境界線を各現象について略說すると大體次のやうになつてゐる。

「出シテ」の音便形「出イテ」の東境は富山、南信、靜岡の東に線を引く事が出來る。未來の「ベイ」は「關東べい」として有名なものであるが新潟・長野にはこの形なく、山梨では郡內、靜岡では富士川以東だけにあつてそれ以西には無い。命令の「ロ」は新潟・長野・靜岡がその東境であるが靜岡は遠江に入ると關西の「ヨ」が漸く現はれて來る。「來よう」に對する「コー」は日本海方面では山形・新潟兩縣に既に見出す事が出來るが、長野・靜岡兩縣にはまだ現はれない。岐阜・愛知に入つて使はれる。打消の「ナイ」と形容詞副詞形の「ヨク」の西境は新潟・長野・靜岡の西の縣界である。指定の「ダ」の西境は新潟縣の西の縣界から岐阜を中斷し愛知の西の縣界を走つてゐる。「拂ツタ」に對する「ハロータ」は北陸道は悉く「ハロータ」の系統であるのに本州中部では「ハラッタ」の促音形が優勢である。「受ケヨー」と「受キョー」の境界は更に西の方によつて近畿の中部を分けてゐる。「見ヨー」「見ュー」の境界は本州では兵庫の西縣界にあるが四國は多く「見ョー」である。中國の中でも鳥取及出雲では「拂ツタ」「花グ」の如き關東式の形が行はれてゐる。九州は下二段動詞の俤を殘してゐるので有名であるが肥筑地方には命令に關東式の「ロ」が行はれ、肥筑と鹿兒島に「善カ」の如き形容詞が行はれてゐる。（以上は大體、新村博士が明治卅七年に國語調査會の調査によつて作られた分布圖を基礎として述べたもので、この分布圖は「方言」第三卷第六號に載せてある）

この種の語法現象の分布の調査は從來あまり行はれなかつたが近頃、永田吉太郎氏が特にこの方面の調査に努力されてゐる。とにかくこの語法現象の分布は東西兩方言の對峙や、九州方言の特異性を明瞭に示すものである。

語法分布の上で九州東北兩地方に類似の現象が少くない。口語法調査報告書にも「九州ニ於ケル云ヒ方ノ東北地方著クハ東方言語區域ニ於ケル云ヒ方ト原形ニ近キモノヲ保存スル點ニ於テ相一致スルコトアリ」と記してある。九州

特有と思はれる四格の助詞「バ」や、接續助詞「バッテン」などが、東北にその類似形を見出し、東北の方向を示す助詞「サ」が九州にも類似形があり、學者に奇異の感を懷かせる。

四　單語より見た區劃　次に單語の分布について觀察して見よう。或單語の全國的分布を云々する事は中々容易でない。物類稱呼は主として單語の分布について記したものと見られるが、全國の各地の方言形を網羅したものとは云はれない。明治に於て日下部重太郎氏が痕跡の方言を調べた事がある。之は國語百談に揭げてある。各地方の方言形を記してその後に次の如く述べてある。

以上は方言分布の參考となるのみならず、人文の區域の上にも參考となる事と思ふ。此の記載について云へば日本アルプスを境界としてその東部にはアバタやジャンカなどの大方言があり西部にはイモクシやミッチャやジャギなどの大方言がある。その中心を假定して見ればアバタ系（關東地方）ジャンカ系（關東地方）イモクシ系（江濃地方）ミッチャ系（畿內地方）ジャギ系（安藝地方）であらう。

單語分布について驚異的な成績をあげられたのは柳田國男先生の蝸牛方言の調査であらう。この調査は蝸牛考一篇となつて言語誌叢刊に收められ卷末に分布圖が添へてあり、先生の方言周圏論の有力なる材料となつた。この論文に扱はれたのは二百四十餘の蝸牛方言で之をデデムシ系、マイマイ系、カタツムリ系、ツブリ系、ナメクジ系に分類しそれ等の方言の發生を說き、言語の中心地に新語が發生するに從ひ在來の單語はその外周に押出される、かくの如き新語の發生を重ねるに從ひ古語は外周へ外周へと逐ひやられる、從つて中心地からの距離によつて言葉の新古を判斷する事が出來る所以を蝸牛方言によつて證明したものである。例へばミナと云ふ語は一番古いらしく之は九州南部に

殘つて居る。デデムシは之に反して近畿の如き中心地にあつてその新語なる事を示し、その外周にマイマイ、カタツムリ、ツブリ、ナメクジの諸系が略々周圍をなして分布してゐる。

柳田先生の單語分布の調査は蝸牛だけに止まらず蟷螂、虎杖等についても創見に富む論文を公にされた。先生の論文に暗示をうけて同樣の調査を一地方に試みた人は少くないが、全國にその資料を求める事は困難なのでこの種の調査は少い。岡山の佐藤清明氏はこの困難な仕事に成功し馬鈴薯、ハコベ、丁斑魚、蟻地獄、片足飛、石拳等について全國的分布を發表した。これ等の單語の方言分布は勿論、各語一樣な分布狀態を示すものでなく、相當に複雜した分布を示して居る。氏が「方言と土俗」第二卷第四號に發表した馬鈴薯方言地圖（假定圖）によれば、馬鈴薯の方言は九州に少く東北や關東に多い。九州ではジャガタラだけで、四國にホドイモ、ゴーシューイモあり、中國にはキンカイモ、コーボーイモ、サンドイモ、近畿にニドイモ、ヤタライモ、ナツイモ、北陸にゴロザイモ、ザイモ、東北にアブラ、アンペラ、ゴショウイモ、ニドイモ、カライモ、關東にカンプラ、ジャガタラ、サントクイモ、セーダユー、中部にコーシューイモ、コーバイイモ等の異稱がある事が分る。

一縣一郡についても異稱の多い方言をとつて調査すると、かなり複雜な分布を呈する事は各地で調査されてゐるメダカの方言分布などを見てもよく分る。濱田隆一氏の天草島のものや、佐々木清治氏の遠江の調査などはその一例とする事が出來る。

異稱に富む方言を調べると同時に、今後は五六種位の異稱を持つ方言に注意して、その分布狀態を調べるのも面白いと思ふ。宮良當壯氏の調査された虹の方言は異稱の少い方言とは云へないが、數十種・數百種の異稱があるわけで

もなく面白い分布を示してゐる。東北や關東がノジで大體統一され、中部はネジ、北陸はミョージで日本海を山陰に及んでゐる。中國には外にビョージがあり、九州にはジュージ又はヂュージが行はれてゐる。

單語の分布はかくの如く複雜である爲に、單語を標準として方言區劃を設ける事は一見不可能のやうにも思はれるが、必ずしもさうでなく、單語の分布も區劃設定上の重要なる資料となる。之は「土のいろ」に發表された宇波耕策氏や佐々木清治氏の遠州の方言地域に關する論文を見て了解する事が出來る。

方言區劃設定は大體以上の音韻・語法・單語の三視點よりするのであるが、時代によるその變遷の強弱から考へると單語は最も變化し易く、語法や音韻は變化し惜きものである。語法形式の分布上の事實と、我々の方言區劃の通念とが多く一致するのはかゝる理由から出たものかと思はれる。

五　國語の方言區劃　以上の音韻・語法・單語の三方面を考慮して國語の方言區劃を眺める時に、前に述べた本州東部方言、本州中部方言、本州西部方言、九州方言の四大方言は、更に精細かく分かれて次の如き小方言を形づくるやうである。

本州東部方言は分れて東北方言と關東方言となる。

東北方言は發音に訛の多いのを以て特に有名なもので、世にズーズー辯の稱を以て知られてゐる。その行はれる範圍は東北六縣の外に新潟岩船郡を併せて頗る廣大な地域である。從つて更に之を二分して三陸岩磐方言と出羽方言とせよとの説もある。事實、太平洋岸と日本海岸とでは方言に幾分の相違があり、特に秋田の八郎潟から山形の庄内地方に亙つてかなり特別な方言が行はれてをる。しかし、その東西の相違は以下述べる各方言間の相違ほど顯著なもの

ではない。地域が廣いだけに之を小分したいのであるが、之を分けると他との均衡が狂ふ事となるかと思ふ。

關東方言は關東地方の方言で關東べいを以て稱へられるものである。山梨の郡內地方はこの中に加へらるべきものである。東北方言は北部と南部とでも稍〻性質の變つたところがあるが、その南部の方言の色彩の著しく微弱となつたのが關東方言である。東北方言の影響は栃木、群馬、茨城、千葉に濃くその他の地方には薄い。この地方は今日の標準語の母胎たる東京語を發生させただけでも十分に研究の價値がある。なほ東京府に屬する伊豆七島の方言は大體關東系であるが、八丈島方言には九州方言に似た性質も見え特に注意すべきものである。

本州中部方言は之を北陸方言と東海東山方言とに分ける。この地方は東西兩方言の中間地帶と云ふべきものであるが、北陸方言には近畿方言の色彩極めて濃厚であり、東海東山の山梨、長野、岐阜、靜岡、愛知の方言はまた特色ある語法形式を發達させてゐる。名古屋方言はその勢力範圍はわりに狹小であるが之も特色ある一方言である。

本州西部方言は之を分つて近畿方言、四國方言、中國方言、雲伯方言の四方言とする。近畿方言は五畿內の外に若狹、近江、伊賀、伊勢、志摩、紀伊、丹波、丹後、但馬、播磨等の諸國を加へた地域に行はれるもので、京阪の上方言葉を中心とする方言である。京都方言と大阪方言とは相當の相違があり、その勢力も京都は東に、大阪は西に及んでゐるやうである。なほ、大和の十津川方言は特殊な方言として注意されてゐる。

四國方言はその性質が近畿方言と、中國方言との中間に屬すべきものと思はれる。東部は特に近畿の影響が多い。土佐は山脈を以て圍繞され且つ九州東海岸と交通のある關係上、特別な方言を發達させてゐる。筆者は嘗て四國の香川、愛媛、德島の三縣と中國の山陽方言とを合して瀨戸內海方言の名稱を與へたが、近來、アクセント研究の進步し

た結果、四國と山陽地方とがアクセントの形式を異にする事が明かになつたので、四國は中國より分離することに改め、また、土佐方言は四國方言に攝する事にしたい。

山陰山陽の兩道の中、伯耆、出雲の兩國は訛の多いのを以て有名である。之を雲伯方言と名づけ、その他の地方の方言を假に中國方言と名づける。之は岡山、廣島、山口及び石見の方言である。因幡の方言は稍〻相違した點もあるが大同に基いて之も中國方言中に數へる事とする。

隱岐が雲伯方言と中國方言との何れに屬すべきかは疑問であつたが、最近、石田氏の研究によつて之は雲伯方言に屬するものなる事が明かにされた。

瀨戸內海の諸島の何れが四國に、何れが中國に屬するかは、藤原氏の研究あり山田氏の調査もあるが、今一度アクセント調査を加へて之を確實にしたいものである。

九州方言は之を肥筑、豐日、薩隅の三方言に分ける。この中、最も九州的特色をもつものは西の肥筑方言と南の薩隅方言である。鹿兒島言葉は他國人に最も理解し難き方言で發音上に種々な特色が多い。薩隅方言には薩摩大隅の外に日向の島津領を加へてよい。薩南諸島もこの薩隅方言に屬するものであるが、種子島方言は著しく性質を異にしてゐる。豐日方言は九州東部の方言で西部とは異る性質を持つてゐる。

なほ琉球については、之を國語の方言內に加ふべきや否やについて議論があるが、既に日本國の領土であり、國語と同系統なる事が明かになつた以上は、之を國語の方言と見て差支なき筈である。理解の困難を云々すれば薩隅方言なども他府縣者には殆ど外國語の觀があるから、之も方言內に加へる事を憚らねばなるまい。琉球方言は之を奄美大島

方言、沖繩方言、先島方言の三つに分けるが、先島方言を更に宮古、八重山の二方言として四つに分けてもよい。奄美大島は今日は鹿兒島縣に屬して居るが、元來、琉球國の舊領で言語も琉球に入るべきものである。

北海道は開拓以來、既に相當の年數を經過して居るが、移住民は出身地の地方語を使用し未だ一方言を形成せずとの觀測から、從來之を國語の方言區劃外において論じなかつたが、最近、柳田先生は北海道に旅行され北海道語とも云ふべき方言が發生し居るにあらずやとの考の下に北海道語の檢討を提言されてゐる。

以上の各方言地域内にも或特別の町村が、移封等の事情により周圍と性質を異にする方言を使用し所謂「言語の島」を作つて居るものがある。之等は山村孤島に於ても發見せらるべきものである。

以上の各方言區域設定の根據ともなる各地域に於ける方言の特色等については各地方の方言の細説に讓つて、一切こゝに之を省いた。極めて簡單なる說明は筆者の小著「國語の方言區劃」にも述べてある。

四　方言研究法

一　研究の困難　方言研究法も一般の國語の研究法と勿論相違のあるべき筈はない。たゞ從來、國語學の研究の對象が古典であつた關係上、資料として文書を多く利用したのに對し、方言研究では、主として實際の對話をそのまま最良の研究物とするために、いく分は取扱に違ふ點はある。材料が無限と云ふべきほどに豐富であり、調査するほど深く入れるので一寸考へると古典を扱ふよりは容易のやうにも考へられるが、實地にあたつてみると何れの方面から、どう手をつけてよいかに迷ふ點があつて相當に困難である。何より困るのは地方人が方言を使ふ事を耻

ぢる傾向があつて之を隱す事である。方言でも今日は標準語がかなり影響して昔のやうな田舍言葉は少い。事實、今日の地方の少年少女は、單語に於ては多く標準語を使用してゐる。その爲に、多くの方言研究者の探求の目標となる方言は前代の方言である。この前代の方言を老人の口から語らせる事は容易でないし、この僅かに殘存せる古き方言と、現代教育の結果、標準語の輸入と共に發生しつつある新しき方言との交錯はかなり複雜で、之を研究するのは更に難事である。

又、方言に關する記錄の間の矛盾も相當に多く、その何れが眞なりやを鑑別する事が他國人には不可能である。尤も、その記錄の年代が違ふ場合は時による變遷とも考へられるが、同時代の記錄の間に全く反對した記事を發見する場合も少くない。又數人の同地方の出身者を集めて調査する場合にも各人の答の間に相違がある事がかなり多い。之は不思議にも思はれるが、各人の言語體驗は皆違ふのだから寧ろその方が自然なのである。老人と若者との答の相違は勿論、同年輩の人の間にも相違はある筈である。從つて方言研究にはなるべく多くの答者や記錄につき材料を蒐集する必要がある。その中で一致したものはその地方に廣く行はれるもので、一致しないものはその地方に旣に滅び行かんとするものと見てよい。兎に角、「さうは云はない」と云ふ消極的な答よりは「さう云ふ」と云ふ積極的な答をとるべきである。この場合困る事は、個人には個人の特別な癖のあることと、記憶の誤りのある事と、時には故意に虛僞を云ふ人もある事である。

直接の問答によつて調査する場合には、また、その發問の態度や方法がその答の良否を決定する。なるべく親しみ易い態度でわかり易き問をかけ、抽象的な問よりは具體的な問を選ぶ事が必要である。その人の熟知してゐる事項と

思はれるものより始めるに若くはない。事物の名稱などの具體的な單語ならば實物によるか標本繪畫によるが最も確實である。これらの方法については實地採集の體驗より會得すべきである。

研究の部門は一般の言語研究と同様に音韻・語法・單語の三方面に分けて調査するのが便利であらう。

二　音韻の研究　音韻研究に入る先決問題として表記法の問題がある。之は表記された言葉を如何に讀むかの問題と、實地の方言を如何に表記するかの問題に分れる。

既に表記されてゐるものを讀む場合にはその時代、または或個人の表記法の性質を考へる必要がある。古いものから二三の例をあげて見る。萬葉集の東歌の漢字音の音價などもむづかしいものの一つである。三四五〇の歌の「乎具佐可利馬利」の「馬」が「マ」か「メ」かを問題にする學者がある。土佐日記の一月七日の「またまからず」は「マカランズ」と讀むべしと云ふ說がある。枕草子、すさまじきものの「轅ほうとうちおろす」の「ほう」は「ポン」と云ふ音を寫したものだと云ふ說がある。促音は鎌倉時代頃から「つ」で表記されるやうになつたが平安朝にも促音はあつたので、たゞ表記法が工夫されてゐなかつたのではないかと云ふ疑もある。事實、今日でも促音を書き表はさない例は往々ある。變つた例では、吉利支丹版の羅馬字などもその表記の約束を知らないとわからないものがある。〔zu〕は「ず」で〔zzu〕は「づ」の假名遣の別に相當する。「お」の音が皆、〔vo〕〔uo〕で表記されてゐるなどは、當時の「お」の音の性質が果して如何なる音であつたかを表記法から考へさせられる一例である。

江戸時代にも種々な表記法が工夫されてゐる（吉澤博士の「本邦音符考」參照）。中でも面白いのは小丸の利用法で半濁音符の外に、促音符や撥音符にも使はれ、三馬によつて〔tsa〕の音を「さ゜」で表はす工夫もされてゐる。

兎に角、方言の記錄を讀む時に常に惱されるのはこの表記法の不完全な事である。之を勝手に推讀する事も頗る危險である。

翻つて、方言を表記する問題に入ると、そこには國際發音記號說と、ローマ字說と、假名說との三種の意見があつて、實際にもこの三種の音字が使用されてゐる。

國際發音記號はもと國際音聲學協會の所定のもので、一八八八年に基礎案が出來、爾來數次の改定を經てゐる。之は嘗て市河博士によりて「萬國音標文字」の名の下に光風館から小冊子として紹介されて居り、近來の英和辭書や英語讀本にもこの系統の發音記號が使用されてゐるので相當に擴がつてゐるが、まだ一般人の使用には困難で學者用のものと見なされてゐる。音字としては理想的のものだが素養のない一般人が使用すると反つて生兵法大疵の基となる憚がある。（音聲學協會々報第二號、第二十七號に最近の同記號一覽表が揭げてある。また第十三號に東京音の同記號表が出てゐる。）

ローマ字は、ローマ字會式と日本式との對立してゐる我國の現狀では之を採用する事は考へものであり、又標準音（東京音）は表記出來ても方言に發見される種々の音を今日のローマ字綴で表記し得るとは考へられない。さればとて新記號などを案出する位ならば寧ろ國際發音記號を使用した方が便利である。

一般人の表音字としては結局、假名が最も便利かと思はれる。たゞ問題は假名をどんな風に使つたら比較的正確に發音を表記出來るかと云ふ點にある。之について音聲學協會で東京音を表記するについて委員會を催けた事があり、同會々報第三十一號に同委員會案と之に對する諸家の意見が載つてゐる。同委員會案によると初めの案は、

カナ音字は在來の片假名（但しヰヱヲヂヅを除く）を採用する。但し次の新記號を認める。

1　ガ行音の鼻にかかるものは「カ°キ°ク°ケ°コ°」とする。

2　ザ行音で破裂性を帶びるものは「ザジズゼゾ」としてさうでないものは「ザジズゼゾ」とする。

3　ラ行音で卷舌となるものは特に平假名で「らりるれろ」とする。

4　いはゆる撥音は凡て「ン」で表はす。

5　いはゆる促音は凡て小文字の「ッ」で表はす。

6　いはゆる拗音はイ列の假名に小文字の「ャュョ」を添へて表はす。

7　長音は「アイウエオ」又は「ー」を添へて表はす。

8　いはゆる母音の無聲化（又は脫落）は「。」で表はす。

9　變母音符を「‥」とする。

10　鼻音化符を「～」とする。

であつたが協議の結果は、2のザ行音の破裂性のものとさうでないものとの區別は必要がないと云ふ事になり「じぢ」「ずづ」で書かれる音は「ジ」「ズ」であらはす事となり、又、8の無聲化又は脫落の記號は「△」又は「▽」であらはす事となり、9 10の二項は省かれた。

方音の表記法については同會ではまだ一定の案をもつて居ない。筆者が簡約方言手帖に示した記法を參考として次にあげて見よう。

一、標準音ハ片假名ニテアラハス。
二、標準音中ニナイ地方音ハ類似音ヲ表ハス平假名デアラハシ調音法ノ説明ヲ記ス。
三、發音的假名遣ニヨル。
四、拗音　シャシン(寫眞)　シューシン(修身)　クヮジ(火事)
五、促音　リッパ(立派)　イッシン(一心)
六、長音　サトー(砂糖)　イコー(行かう)
七、鼻音　シンパイ(心配)　ンマ(馬)
八、アクセント　ハシ(橋)　ハシ(箸)　ハシ(端)

拗音・促音の表記法は前にあげた音聲學協會の(5)(6)の規則と同じ趣旨だが、文字の大小の區別は書方によると見分けにくい場合が多いので更に二字の間に連弧を置く事とした。長音はサトー(砂糖)として、サトオの記法はトとオとの間に休止がある時の記法とする。

方言の表記法として筆者の主張する事は、

東京音(標準的の)にない特殊な方音はすべてそれに似よつた音の平假名を當てておいてその實際の音價は凡例で説明する。

といふ點にある。卷舌のラ行音を「らりるれろ」であらはすのもその一例である。「クヮ」は東京音にはない音だが標準音と見たらどうであらう。母音が變つた場合にはその母音を含む音節、子音が變つた場合にはその子音を含む音節を平假名であらはす、例へば東北地方の〔Sü〕を「す」であらはし、出雲地方の〔Sï〕は「し」であらはし、〔Fa〕を「ふァ」であらはす

（この場合「は」を用ひないのは從來の慣例を尊重する爲である）九州の〔tu〕も同じ理由で「とぅ」であらはしたい。〔tsa〕は「つァ」、〔va〕の如きは「ゔ」又は「ヴァ」、〔je〕（や行のエ）は「え」で、〔wo〕は「を」で表記する。これ等はやゝ統一を缺く樣であるが慣例をなるべく尊重する爲の便法である。

この方法によると或地方に例へばラ行子音が二種あつて何れも標準音と違ふ場合には表記に困るが之等は變體假名などを補助的に用ひたらどうかと思ふ。鼻母音は「ン」を小書して「あン」（ã）のやうに書いたらどうだらう。實際の音價は調音法を註し、出來るなら國際發音記號との對照を示したい。

とにかく平假名によつてそれが標準音と相違した發音をもつ音節なる事を一目の下に明かにしたいのである。子音だけが獨立して用ひられる事の少い國語では子音に對する假名記號は之を示す必要はあるまい。音韻組織を示すためにその必要があるならその表は國際發音記號によるべきである。單獨の母音子音の表よりは國語に於ては五十音圖の如き地方音節表を示すべきである。表記法についてはこの程度に止め、次に音韻の實際の研究法に入る事とする。

音韻の研究をするについては、どうしても音聲學の知識が必要である。佐久間・神保兩教授の著書は勿論結構であるが、方言の音聲現象を多くとり入れた金田一教授の國語音韻論の一讀をすゝめたい。なほ小倉博士の仙臺方言音韻考は一地方の方音研究の範を示すものとして推賞するに憚らない。音聲學協會の會報や音聲の研究にも方言の音韻現象を扱つた論文が多く甚だ有益である。

音韻研究では先づ母音・子音から入つて音節の種類に及ぶ音韻組織の研究と、音韻の脱落や音韻同化や音韻相通を扱ふ音韻變化の研究に分れる。後者は連音の上に起る現象である。

ある方言の音韻組織の研究をする事、特にその母音や子音の性質を究める事はかなりに困難な事である。我國語は前にも述べた通り子音が單獨に現はれる事は殆どなく、常に母音と結合し音節となつて發音され、この音節は我々の意識では言語の單位となつてゐる。子音と母音とが音節に結合される時に互に影響をうけ、特に子音は結合する母音によつて調音部位が變化する。またその地方に發音される子音がどの母音にでも結合するかと云ふと必ずしもさうでない。東京音で云へば〔ta〕〔te〕〔to〕の連合はあつても〔ti〕〔tu〕の連合は〔tʃi〕〔tsu〕に變化して、原音では發音されない。

地方の音韻研究に際しても先づこの音節の種類を調べ、その後に之を母音・子音に分析し音韻組織表を作成すべきであらう。音節の種類の調査は多數の語彙から歸納するが正しい方法であるが五十音圖を利用するのも便法である。

個人の音聲から母音・子音の音質を研究するには正しき聽覺によつて之を辨別すると共に人工口蓋などの利用によつて調音部位を圖錄する方法も考へられる。特に自己の音聲を研究するには人工口蓋は頗る便利である。齒科醫に依頼すれば二、三圓で調製してくれる。この人工口蓋は個人個人の口腔の形に應じて作るものであるから、旅行先で地方人の音聲を研究するには應用しにくいが、音聲學協會々報第一號にはかゝる場合に使用する人工口蓋の即席製作法が載つてゐる。その他の補助的方法としては口形寫眞の撮影などもよい。

方言の音韻變化は多く標準語と對照して行はれる。キツネをケツネと云ひ、ウナギをオナギと云ふ如き例を母音變化と云ひ、ザシキをダシキ、ミカンをニカン、トンボをドンボと云ふ如き例を子音變化と云ひ、これ等の地方語を訛語と云ふのが普通である。ここに注意すべき事は、訛語の稱は、假に標準語を正語とした上での名目である。歴史的に見てどちらが原語かと云ふやうな事を考へた上の名目ではない。基準を標準語にとつた上での訛語である。時には

外形は類似してゐても標準語とその訛語と思はれてゐるものとの間に關係がなく互に獨立した言葉の場合もあり、また標準語と訛語との關係が單なる音韻變化でなく類推やその他の複雜な原因から出來たものもあらう。（雜誌「方言」の柳田氏の「音韻事象の考察」參照）。それらの事は一應は考慮に入れても、各語について一々之を考證してゐられないので標準語と同系と思はれ音の少し變つた語を集めて訛語と云つておく次第である。

この訛語の調査をどんな方法によつて行ふべきかと云ふに、前に述べた金田一・小倉兩教授の著書や國語調査委員會の二回にわたる「音韻取調ニ關スル事項」などが參考となる。調査委員會のものは保科氏の國語學精義や日下部氏の現代國語思潮續篇に轉載してあるが、第一期には主として長音の分布や、ヤ行の〔je〕、ワ行の〔wi〕〔we〕〔wo〕、カ行鼻濁のガ行音、〔kwa〕〔gwa〕音、ジヂ、ズヅ音の分布等を主題とし二十九條を、第二期には、

第一、母音ノ部

（甲）母音ノ轉換　（乙）長母音、重母音ノ轉換

第二、子音ノ部

（甲）清濁ノ轉換　（乙）直拗ノ轉換　（丙）音ノ轉換　（丁）音ノ變化

第三、熟音ノ部

（甲）音節ノ轉換　（乙）音節ノ融合及ビ變化

とし四十一條の取調條項が例をあげて示してある。度々繰返して述べた如く國語では音變化は各音節について調査するがよい。「キ」が「ケ」となる例と、「ヒ」が「ヘ」となる例を漫然と「イ」列音が「エ」列音に變化するものとして一括する

如き事は面白くない。

音韻變化の際には語頭音と語間音とを區別する事が必要である。例へば東北方言で〔k〕〔t〕が有聲化して〔g〕〔d〕となるのは語間音に行はれる音則であり、東京では、語頭に〔g〕、語間に〔ŋ〕とヵ行濁音が使ひ分けられてゐる。音韻變化に連音の關係を常に注意しなければならない事は大切な事である。東北方言の語間の〔k〕〔t〕が時に有聲化しない場合がある。その時には直前の音節が無聲音節の事が多く之は一つの同化現象である。鹿兒島でも〔r〕が〔d〕となる事が多いがその前に「シ」の音がある時に限り〔t〕になる。

音韻變化にはその勢力に種々の段階のある事を知らなければならない。即ち或變化はその方言内では殆ど規則的に例外なく行はれる。例へば前の東北方言の〔k〕〔t〕の有聲化の如きものは之である。次にかなり多數の例はありながら同時に少なからぬ例外をもつものもある。中國に於ける〔z〕〔d〕の轉換などはその例である。次に極めて少數の語に限りて行はれる變化がある。例へば〔s〕が〔h〕に換へられたと云はれてゐるハン（敬稱接尾語さん）ナハル（敬語助動詞なさる）マヘン（丁寧助動詞の打消形ません）ホレ（それ）の如き例は有名なるにも拘らず、その他にはあまり澤山の類例はない。況やその反對の〔h〕が〔s〕と換はつた例は極めて少い。「セビ」（蛇）この場合でも「シ」と「ヒ」との轉換だけは澤山の例があつて東京人が「ヒ」を殆ど皆「シ」とする事は周知の事であるが、その反對の「ヒチ」（七）「ヒタ」（下）「ヒク」「敷く」「ヒカル」（叱る）などは關西に例が多く特に〔t〕の前で著しい。尤も之を〔i〕と〔i〕との轉換とみれば別であるが。

かくの如く音韻變化には勢力の相違があるので方言の音韻現象を調査するについてはその方言に於ける勢力に注意しなければならない。例をあげる場合にも音則的のものは數例をあげる丈でよいが、勢力の微弱な音韻變化は出來る

だけ類例を網羅する必要がある。稍〻多數の例をもつ音韻變化ではその例外となるべきものをも擧げる必要がある。一般に他地方に無いその地方特有の現象と思はれるものについて詳記し、珍らしからぬ現象は略筆してよい。

我國の方言中に現はれる音韻現象の中で特に注意すべきものを揭げて見ると音韻組織では、

(一)母音に於てはイ音、ゥ音、ェ音の音質に注意したい。東北や出雲にイとウとの中間音の存在してゐることは有名であるが、イ音とェ音との前母音の種類も各地に種々な音があるやうである。オ音でも開いた音の有無を調べたい。

(二)母音の變化では、イ音とェ音、イ音とウ音、ゥ音とオ音との間の轉換が多い。二母音が續いた場合、例へばアイ、オイ、ウイの音變化は注意すべきものである、特にアイの變化は重要なものと思ふ。

(三)母音の無聲化又は脫落の現象は東西方言によつて相違がある。本州西部の方言に特に注意したい。

(四)子音ではラ行系統の音が各地に於て性質が違ひ無聲化や脫落も起る。ハ行バ行の唇音は東北や出雲にあるが之も分布の注意すべきものである。その他カ行鼻濁音の分布も頗る面白いものである。

(五)音節では「ヂ」「ヅ」の外に〔ti〕〔tu〕の分布、〔ʃe〕音の分布、クヮの唇的拗音、ワ行ヤ行音の殘存、その他標準音に見えない音節を探したい。

(六)子音變化では有聲化、無聲化、鼻音同化・ダ行ザ行ラ行間の變換、「ュ」と「イ」との轉換、特に或地方に限る特殊の音現象を精査したい。(房州の語間の〔k〕音の脫落や、山形のヤ行音の變化の如きはその例である)。

西洋では方言の研究と云へば音韻の研究がその中心となつてゐる。我國の音韻研究も方言まで進出しなければ不十

である。
アクセントの調査については既に本講座には服部學士の研究が發表され、調査法にも觸れて居られるからそれに讓つて省いておく。

三　語法の研究　方言語法の研究は音韻と同程度に困難である。基準が判然としないだけにより以上に困難だとも云へよう。語法の方面では從來の文語法や口語法の組織によつて調査することさへ問題である。チエンバレンが琉球語研究に於て名詞の孤立法を説き、松下大三郎氏が日本俗語文典に體詞の語尾變化を説いたやうに名詞の格變化を説く事は方言語法には避くべからざる事である。又、文語法や口語法で規定したやうな助詞・助動詞の分類は方言語法には必ずしも適切でなく、標準語法の表現形式と方言語法の表現形式と一致しないものも少くない。方言語法の組織はやはり歸納的に新しい法式を立てねばならないやうに思はれる。

しかし、この新な法式が案出されるまでは從來の語法に準據する外はあるまい、文部省の口語法及口語法別記や松下大三郎氏の標準日本口語法などは新しい見方もあつて參考となる。別な意味で國語史の知識を持つ事が望ましい。各時代の文法史なども餘裕があれば見ておく方がよい。吉澤博士の國語史概説なども便利であらう。方言を扱つたものでは三矢博士の「莊内語」は簡單なものではあるが莊内の音韻・語法を説いたもので語法研究の範とすべきもので、動詞・形容詞の活用、助動詞・動詞の相、てにをはと項を分けて記してある。村林孫四郎氏の鹿兒島語法も小冊ではあるが要を得たものである。方言研究でも語法を説いたものは比較的少く、以上の外の主要なものをあげれば、

青森縣方言訛語　　青　森　縣　廳
秋田方言　　縣　學　務　課

米澤言音考　内田慶三　相馬方言考　新妻三男
静岡縣方言辭典　師範學校　南紀土俗資料　森彦太郎
山口縣方言調査　山口高女　島根縣に於ける方言分布　濱田女子師範
宇和島語法大略　岡村三郎　佐賀縣方言語典一斑　清水平一郎
熊本縣方言音韻語法　池邊用太郎　肥後葦南方言考　齋藤俊三

外に近く大分縣方言考と云ふものが發行される由を聞いて居る。尤も近來、語法研究が漸く注意されて來て雜誌に掲げられた論文や未發表の稿本の類は相當な數に上るやうである。

語法研究で主要な研究問題は動詞・形容詞等の用言の語尾變化と、助詞・助動詞の種類用法等である。用言の活用の調査は容易に似て甚だ容易でない。之は各語毎に精密な調査を要するものである。地方によつて活用の種類の違ふものも少くないし、頗る複雜な活用を持つたものもある。次の論文はこの方面のものとして出色な調査である。

周桑郡に於ける口語動詞「死ぬ」「往ぬ」の語態調査概報　杉山正世(愛媛縣周桑郡郷土研究彙報　第一、二號)
諸方言に於ける動詞「蹴る」の活用に關する調査　橋本進吉・岩淵悅太郎(方言三ノ四)

「飽」、「借」、「足」、「延」等のやうに四段と一段との兩形があつて地方によつてその何れかの活用を用ひたり、時に之を混用したりする動詞も少くない。文語一段動詞や「寢る」「出る」のやうな動詞(時に文語上二段動詞)はラ行五段に近く活用する事もあつて注意すべきものである。

カ行變格とサ行變格とは動詞中、最も地方的變異に富むものである。また、活用の問題ではないが動詞中には「出

る」「出來る」や「有る」、「ゐる」、「をる」(居)の如き、使用法に地方的の癖のあるものもあり、「ブンナグル」「ハントバス」の如き接頭語にも地方色がある。形容詞では東北と九州と八丈島とに夫々變つた活用を見出す事が出來る。東北には終止形に「ば」「ども」が連接する地方があつて已然形發達以前の形を思はせる。肥筑方言・薩隅方言の「善か」の終止連體形はあまりに有名であるが八丈島にも類似の形があつて研究者の興味を惹く。

その他・形容詞には「狹(セ)コイ」「忙(セワ)シナイ」のやうなコイ、ナイ等の形をもつものがあり之にも地方的特質を眺める事が出來る。

助動詞等を使つて受身・使役・打消・推量・過去・未來等の種々な表現をする方面は方言語法の研究上最も中心となる方面である。從來は大體文語法の助動詞の分類を利用し之を基準として調査して來たが、それだけではどうも物足りない感を禁じ得ない。助動詞の立場とは別に表現の種類や形式について新しい考察が加へらるべきであらう。

國語調査委員會の方言採集簿は時・法の言ひ表はし方として過去。未來。已了。繼續。受動。能動。使役。被役。打消。疑問、反語。推量、想像。條件、理由。決意、斷定。希望、願望。傳聞。命令。禁止。感情ヲアラハシ又ハ餘情ヲ殘ス云ヒアラハシ方の十八項を立て、外に「待遇上の諸種ノ言ヒアラハシ方」として接頭語・接尾語の用法。代名詞。敬讓動詞。尊敬、謙遜、驕傲、輕蔑等の表現を數へてある。以上の各種の表現は何れも注意すべきものであるが、特に待遇上の表現は今後重視して調査したいものである。地方でも目上、同輩、身內、目下に對する言葉遣には區別があり、人の呼稱などについては嚴重な言ひ分けがある事が多い。地方語に敬語が無いと云ふのは「ゴザイマス」「ナサイマス」「イタシマス」等の言葉そのものが無いのでそれに相等する云ひ方はある筈である。國語と國文學百十三號

に小森俊平氏の方言より考察したる敬語の用法と云ふ論文があり、永田吉太郎氏の方言に連載中の方言語法の問題中に敬語助動詞ナサルの方言形が報告されてゐる。

助詞の方面では近く永田氏の方言資料抄（助詞篇）が公にされる筈である。

この語法の調査法を考へて見ると音韻調査以上の難問題である。柳田國男氏が國語教育の方言研究號に敬語に關聯して語法調査につき次の如く云はれてゐる。

日本語の語法なるものを知らうとするならば終始人と人との關係に留意し採集には先づ平等の友人同士のものを掲げて次にその上下の變化を見なければならぬそれに對して安心してよい樣な資料は私にはどうしても得られぬから何としても手が付かぬのである。……そこで私の案といふのは先づ採集の地域を見立て次には大體の目的を立てしかも採集は人の不用意の會話から實際用ゐて居るもの即ち活きて居る言葉を前後の續きと共に覺えて來ることだと思つてゐる……土地に育つた人ならば永い月日の記憶中に自然耳で聽いたものゝ若干が留まつて居るだらう責めてはさういふものでも出來るだけ正しく列記して比較研究の人々にもう少し安心な資料を與へると共に各人自分の國語の恩惠をもつと具體的に感得する機會を作りたいものである。

嘗て露人ポリワノフ氏が長崎縣三重村方言を調査した際には土人の會話―土俗に關するもの―と晋譯を純粹の方言のまま晋字に轉寫し之に若干の脚註を附して語法の資料とした事がある。活きた自然の方言の表現を見る爲にはこの外に良法は無いのかと思はれる。但し語法の大體の粗描をしようとするならば現在行はれてゐる短文の方言譯の如き方法も簡便な一調査法かと思はれる。但し之は範例の標準語に引かれる爲に人爲的な不自然なものとなるので全文を純粹の方言と考へてはならない。その中の所要の形式だけを抽いて調査資料とすべきである。次に參考の爲に簡約方

言手帖に載せた文例をあげて見よう。

1 お前達は六時前に起きなければいけないよ。
2 旅行は延びるか延びないかまだわかりません。
3 賣つてゐないのなら借りるよりほかしかたがあるまい。
4 あいつは仕事に飽きるとすぐ遊びに出る。
5 死ぬ人もあるし生れる者もあるのだ。
6 兄は病氣で寢てゐるが弟は元氣で鞠を蹴つてゐる。
7 外出しないで今日は勉强せねばならん。
8 酒を飲んだり歌を歌つたりして半日遊んでしまつた。
9 私が落した本はたしかに拾つた人があると思ふ。
10 便りが來なくとも案じないで待つておいで　（以上十問は主として動詞活用及び音便調査のため）
11 よく御覽、これとそれとどつちが古い。
12 お醫者様に早く見てもらふ方がいいでせう。
13 畑に花が咲いた、黄色なのは菜の花で白いのは大根だ。
14 下の狭い座敷に雨が漏つてゐる。
15 むづかしい本でも假名をつけたのならおれにも讀める。　（以上五問形容詞活用）
16 こんなうるさい所では何一つ考へられない。

17 去年は行かれなかつたけれど今年こそは是非行くつもりだ。
18 私達は妙な事に母に叱られるのが一番恐しかつた。
19 君はずゐぶんひどく蟲にくはれたれ」。蚊が食つたのさ。
20 あなたも奥さんに永く寢られてさぞお困りなすつたでせうな。　（以上五問、可能、受身）
21 誰かに風呂に水を入れさせろ、下女に火をたかせる。
22 何かと思つて下男に見させたら大きな犬だつた。
23 あれをここへ來させることはいけない。
24 花や豆はもつとよくお煮よ、堅くて石のやうだ。
25 一寸來い、ここを見ろ、このいたづらはきさまだらう。（以上五問、使役、命令）
26 「墨でお書きなさい」。筆はどこです。
27 これを十錢ほど買つて下さい。
28 おい本をどれかとつて呉れ。
29 お前はもうあんな事をするな」。決してそんな事は今後致しません。
30 どなたもお靜になさい、騷がずにゐて下さい。　（以上五問、希求、禁止）
31 その港からあすこの島までは發動船で行かう。
32 あの蜜柑は酸つぱいから捨てよう、とても食べられるもんか。
33 買物がてら町へ行つて見よう、一緒に行かないか」。行くとも。

34 飲みながら話しませう、まアごゆつくりなさいまし。

35 私が敎へて上げよう。 （以上五問、意向、勸誘）

36 新聞はそつちにないか」。はい、ございません。

37 それは先生の本か」。いいえ、學校のです。

38 その花はいくらだ」。はい、二十錢でございます。

39 入物ごといただいても宜しうございませうかしら。 （以上四問、疑問）

40 今夜は冷えるから夜中に雪が降るだらう。

41 雨ばかり降つてゐたのにやつと晴れたので氣持がよい、梅雨もあけるらしい。

42 その柿は赤いけれども澁からう。

43 風こそ吹くけれど雨が降らないものだから人出が多い。

44 蚊さへ少ければ夏は冬より凌ぎやすい。

45 それから南の方へ二三丁ぐらゐ行くと停車場へ出ました。 （以上六問、接續助詞）

46 あのかたは山田さんと言はれる方です。

47 誰やらが錢をここらでなくしたさうだ。

48 本だの繪だの色々いただいてありがたうございます。

49 菓子が食ひたい、湯なり水なりほしい、それだけしかないのか」。それきりです。

50 旗が立ててある、御祭らしい、さうさう初午だつけ。

51　昨日花見に行ったらう」。行ったところが雨に降られた。
52　叔母さんがおでかけになる、お竹がお供申す筈です。

この文例はもと音韻語法の外に代名詞・副詞などをも同時に調べたいつもりで作り、それも僅か五十二問中に主要な語法形式を網羅しようと試みた爲に作爲のあとが著しく無理が多い。例へば體言の格變化は體言の終りの母音が〔a〕〔i〕〔u〕〔e〕〔o〕の場合と、撥音で終る場合などを考慮に入れ、之に「は」「を」「に」等のつく例をも加へてある。主要な助詞の用法は入れてある積である。助詞の研究では格助詞と副助詞と接續助詞に特に注意したい。語尾の間投助詞（之には代名詞から來たものもある）。ナンシ、バンタ、ネヤ等の類も注意すべきものである。

この文例はまだ改良する餘地が多い。國語調査委員會の口語法取調ニ關スル事項は第一期のもの三十八條、第二期のもの九十條である、全文は前に述べた日下部氏の現代國語思潮續篇にも附載してある。之は一文に一形式を含めた短文の例をあげてある。例へば「ニ」の助詞では、「家ニカエル」「遊ニイク」「机ノ上ニノセル」「御佛前ニソナエル」「アナタニ差上ゲマス」「東京ニ住ンデイマス」として「ニ」の部分の方言形を答へさせる事としてある。

一事項一短文にして調査文例を多くする方がよいか、數個の問を併合して文章を作り文例數を減じる方がよいか、夫々得失があつて一概に何れとも云へない。濱松師範が昭和六年に西遠の方言調査を試みた際に語法研究資料として百の文例を選定し之に方言形を添へて答を求めた。之には方言形が次のやうに示してある。

　　　　　　　　　　　　ナガラ　　ソー
（文例）　歩きながら話さう。　アルキガテラ　ハナサス(ニ)
　　　　　　　　　　　　ガツラ　　サズ(ニ)

何れにもせよ、この文例の方言譯はその方言の語法の特徴を採る以上のものではない。その特徴を捉つた上は之を精究してやがてその語法の體系を作らなければならない。ここでも方言研究はその方言の特徴の記述に十分の力を注ぐべきことを力説したい。全體を一通り記述するよりは、特殊語法を精細に記述説明すべきである。

音韻も語法も畢竟はその土人が音聲學や語法の素養を積んで丹念に之を研究するにますことはない。かくの如き研究者が全國の各地に――特に僻遠な村落や島嶼に――多數ほしいのであるが未だその域に達しない。初等教育に携はる人こそ、その地位と云ひ素養と云ひ最もこの適任者と思はれる。

四　單語の研究　單語の研究には二つの方法がある。一つは標語を用意して之に該當する方言を求めるもの、一つは地方の自然人事に直面してあらゆる機會に單語を蒐集する方法である。

他國人が短時日に一通りの單語を蒐集するには標語法は便利である。その代り地方特有の單語を失ふ懼もあり、また標語と方言とは必ずしも一致するものでないから類似の單語を以て標語と同じものと速斷する嫌もある。簡約方言手帖にあげた單語はなるべく方言量の多いものを選んだのであるが參考の爲次に揭げておく。

一　天文地理　風位方言　太陽（月）。參星、入道雲、雷（落雷する）、梅雨、氷（氷がはる）、氷柱、霜柱、霙、旋風（嵐）、昨夜、一昨夜。明々後日、明々々後日、夜明、朝、夕暮、夜（夜業）、終日、終夜、峰、山頂、峠、坂（傾斜地）、崖、洞、谷、濕地、石地 不毛地）、叢、急流、淀（淵）、河岸（物洗場）、砂濱、暗礁（露礁）、浪、粘土、石油（石炭）、洪水、地震、○地名

二　動物植物　犬、猫、鼠、梟（木兎）、燕、杜鵑（郭公）、啄木鳥、鶺鴒、魚狗、かいつぶり、よしきり、五位鷺、みそさゞい、比目魚（鰈）、鮪、いな（ぼら）（わらさ）、鮪、鰹（鰹ノ子）、鰻（鰻ノ子）、鰆、沙魚、杜父魚（カジカ）、丁斑魚、たなご、蛙、蝮蛇、

蜥蜴(金蛇)、蛙、ひきがへる、蝸牛(蛞蝓)、蝶(毛蟲)、蠶(蠶蛾)、蜻蜓、蝗(ばつた)、蟷螂、ありぢごく、あめんぼう(水すまし)、蟻(蜂)、水虎、化物

無花果、團栗、松毬、椿實、桑實、柚實、蘗藁(蕗)、土筆、木槿、棒、玉蜀黍(とうきび)、馬鈴薯、甘藷、南瓜、蕃椒(胡椒)、蠶豆、春菊、葱、茄子、きのこ、菫、翁草、かたばみ、虎杖、まんじゆさけ、露草、書顔、鳳仙花、蒲公英、母子草、

三　**人倫肢體**　父、母(乳母)、伯叔父(次男以下)、伯叔母(次女以下)、兄、姉、嫡子(長男)、末子(愛子)、主人(旦那)、主婦、息子(坊様)、娘(嬢様)、後妻、本家、分家、親族、血統、私生兒(内證金)、乳兒、子供、青年、大人、老人、下男、下女、食客、妾、情婦、馬鹿、怠惰者、臆病者、意氣地無、朝寢坊、寒がり坊、虚言者、(虚言)饒舌家、お世辭者(お世辭を云ふ)、お轉婆、吝嗇者(儉約する)、財産家、道樂者、好色漢、醉漢、神官、市子、賣卜者、仲買、丁稚、行商人、桶屋、土方、獵師、魚屋、漁師、(海女)、女郎(私娼)、乞食、掏摸、强盜、頭(頭痛がする)、旋毛、禿額、眉毛、脣、齒(齒が痛い)、唾(唾をはく)、痰(痰をはく)、咳(咳をせく)、腹(腹が痛い)、指、膝(膝頭)、踵(踝)、臀(肛門)、男陰(小兒ノ陰)、女陰(女ノ卑稱)、月經、黒子、痣、腫物、感冒(風をひく)、赤痢、癩病、梅毒、疱瘡(蕁疹)、腋臭、吃(吃る)、啞、片目、火傷、〇人名

四　**衣食住**　着物、晴着、仕事着、寢間着、筒袖、袖無、胴着、肌着(襦袢)、半天(羽織)、褞袍、股引(尻端折)、腰紐、男褌(女褌)、洋傘、足駄(下駄ノ齒)、駒下駄、木綿糸、綿、裁縫(仕立直し)、洗濯、食事、副食物、五目飯、雜炊、味噌(味噌汁)、酒ノ肴、刺身、蒲鉾(半平)、口取、糠味噌漬、菓子、供餅、飴、炒(コガシ)、酢、草屋根(葺替)、棟(棟上祝)、庇、物置二階、柱、部屋、爐ノ座席(爐縁)、臺所(流シ)、竈、井、小屋、便所、湯殿、下水、屋敷林、押入、窓(引窓)、雨戸(棧)、

庭、土間、上リロ、燃料、マッチ(附木)、松葉、塵芥、陶器、椀(茶椀)、箸、飯杓子、米櫃、摺鉢、摺木、爼板、庖丁、小刀、徳利、長火鉢、五徳、十能、七輪、釜(茶釜)、笊、東子、水甕、桶(擔桶)、踏臺、拂塵《ハンキ》、箒、細杷(熊手)、槌、鋸、盥(箍《タガ》)、秤、天秤棒、半紙(巻紙)

五　人事・年中行事　姙婦(石女)、岩田帶、忌屋、產婆(子を產む)、出產祝、產衣、襁褓、宮詣、嬰兒籠、おしやぶり、紙鳶、獨樂、お手玉、竹馬、飯事、片足飛、石拳、鬼事(隱鬼)、根木打、人形、許嫁、見合、媒酌人、結納、婚禮、花嫁(妻)、里歸、野合、離緣、寡夫(寡夫)、病氣(看護する)、怪我、葬儀、葬送(蓮臺)、骨拾、墓地、穴掘人、遺品分、一周忌(法事)、喪服(服忌)

六　雜載　祭前夜、祭、祭翌日、山車、饗應(酒宴)、會飲、土產、祝儀(心付)、返禮(御移)、釣錢、嫉妬、惡口(私語)、喧嘩、絕交、仲間外れ、共有、賴母子、心配事、緣起、運、避病院、鳥打帽、左利、倒、私の家、一頭(獸)、一尾(魚)、一返、二合五勺(五合)、一升、二分ノ一(三分ノ一)

七　動詞・形容詞・雜詞　驚く、怒る、困る、泣く、叫ぶ、叱る、呻る、睨む、目が覺める、嗅ぐ(香ふ)、歩く、倒れる、正座す、胡座す、安座す(寢る)、負ふ、抱く(持上る)、弄る、打擲す、破壞す、戲れる、虐める、嘲弄す、威す、羞む《ハニカ》、始める(始まる)、寄越す、なさる(なさい)、下さる(下さい)、死ぬ、孵る、生える(成長する)、腐る、實が落ちる、失なる(探す)、下りる(落ちる)、整理する、出來る(出る)、居る、堪へぬ

善い、賢い(狡猾な)、可愛い、可愛相だ、醜い(變な)、汚い、恐しい、淋しい、くすぐつたい、じれつたい、大きい(太い)、小さい(細い)(細かい)、柔かい、暖かい、眩しい、まづい、きなくさい、丈夫だ、持ちがよい、粗末だ、五月蠅い、面倒くさい、忙しい、苦しい(つらい)、大儀だ、ひだるい、惜しい(惜しむ)、羨しい(羨む)、恥しい、氣の毒だ

そんな(そんなに)、常に、度々、先刻、後刻、直に、一寸、久しく、不意に、何故に、澤山、甚だ(非常に)、悉く、全く(少しも)、是非、屹度、態々、反つて、生憎、好都合に、漸く、丁度、一番(最も)、其故、けれども、はい、さうですよ、いいえ(いやだ)、もしもし、おやおや、あらまあ、○種々の挨拶

以上の語彙は全國各地に存在すべき語詞で而も方言量のなるべく多きものを選んだ。從つて一般的であるだけに或地方には適切でない恨みがある。

單語を蒐集するためにはその地方の自然や人事について直接に採集するにしくはないが、この直接採集は本道ではあるが決して易行道でない。種々の事に興味を持ち、種々の知識を具へて居なければ成功しない。極端に云へば植物名は植物學者、昆蟲名は昆蟲學者にして初めてよく集め得られると云ふものである。田中茂穗博士の魚名方言、牧野富太郎博士の植物方言を初めとし、山林局の樹木名方言集、農務局の鳥類方言等をその例とする事が出來る。

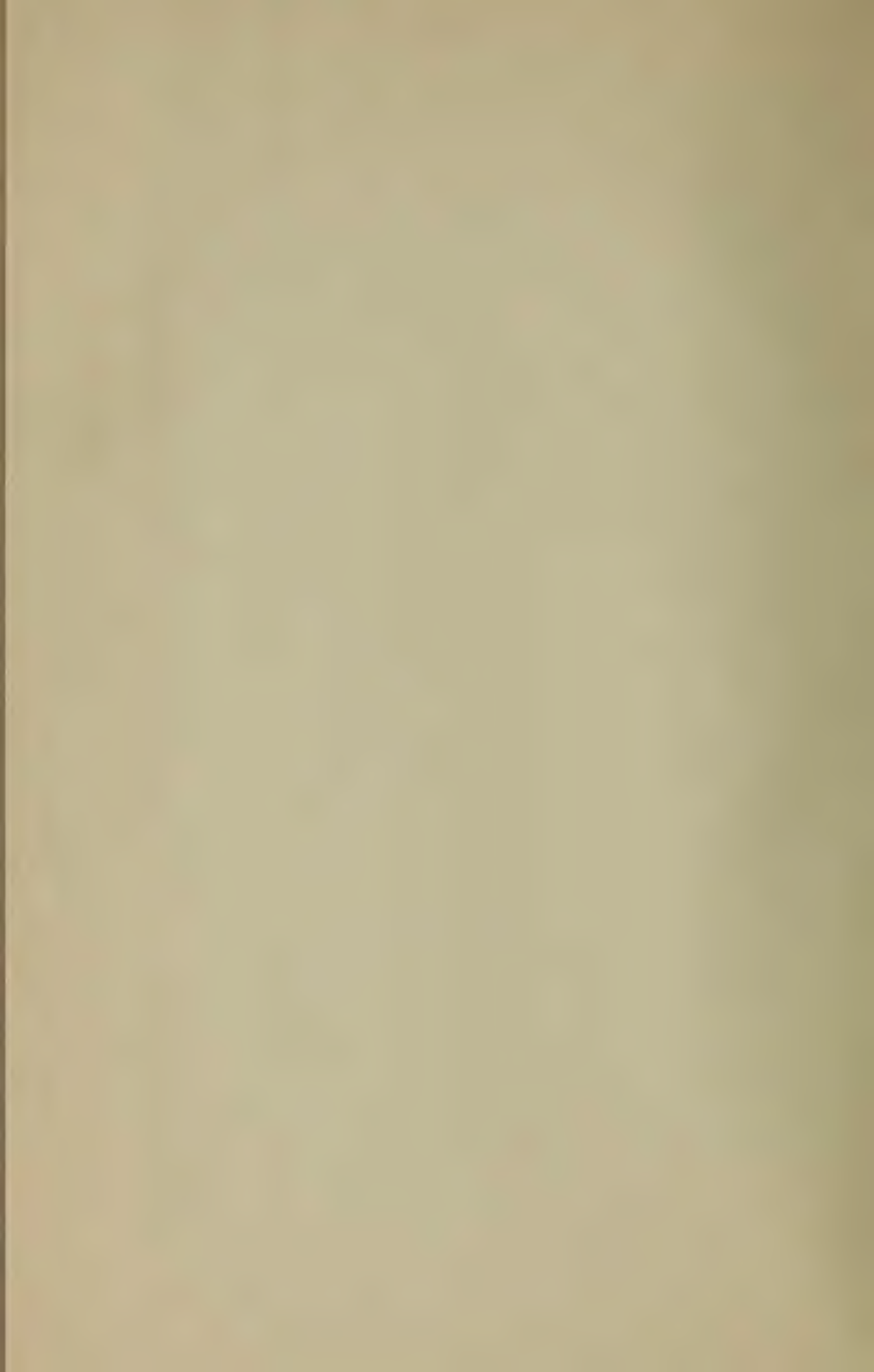
上記の如き專門知識は姑く置くも民俗學に關する一通りの素養がなくては村落の方言の蒐集は成功すべくもない。民俗學書の外に柳田國男氏の山村語彙、漁村語彙、農村語彙が完成したら、後進がどの位のよい手がかりを得るかわからない。「旅と傳說」に連載中の年中行事調査標目の如きも民俗學者ばかりでなく方言採集者の是非一讀すべきものである。近く公刊された宮本勢助氏の民間服飾誌履物篇の如きも民俗學と方言との關係を語るものと云へよう。

有形な物の名は集めやすいが無形のものは之を集める事が困難である。動詞・形容詞の類も注意しないと閑却しやすいものである。從來の方言集が兎角、名詞本位となつたのもそのためである。動詞・形容詞は名詞に關係のあるものであるからそれとともに採集するのも一案である。例へば田植の行事を中心とし之に關するあらゆる名詞を集める

と共に關係の動詞を集めるのも一方法である。田植の行事を人に說明する態度で考へたら種々の形容詞や動詞も考へ出される事と思ふ。また名詞と動詞とは互に深い關係にあるものも少くない。「齒ガハシル」「腹ガコワル」の類を初めとしてその關係が緊密となれば慣用句となる。「ゴウガヤケル」から「ゴセヤク」と云ふやうな句となれば之はもう切離すことが出來ない。從來、かゝる熟語慣用句があまり集められて居ないかと思はれる。また寫容擬聲語や兒童語にも地方的色彩のあるものがあり、人名地名にも地方特殊のものがある。

單語の蒐集に際してもその地方の地方色の濃厚なもの、即ち、その語彙でその地方を具現するやうなものを多く集めたい。すべて一地方の單語を集める時、各地の方言、少くも隣接地方の方言の知識を持てば極めて便宜が多い。

音韻・語法・單語の研究にも常にその使用地域の觀念を忘れざる事は方言研究者の義務である、採集年月と使用區域を明示せず、表記法の不完全なる方言集の如きはその價値の大半を失つたものと云つてよい。

紙幅と時日の關係で說くべき事を洩らしたのは遺憾であるが、これで筆を擱く。(完)

國語科學講座
（第六回配本）

昭和八年十二月二十五日印刷
昭和八年十二月三十日發行

東京市神田區錦町一丁目十番地
編輯兼發行者 株式會社 明治書院
代表者 三樹退三

東京市神田區三崎町三丁目八十九番地
印刷者 細谷祐三

發行所 東京市神田錦町一丁目 株式會社 明治書院